

異世界因果のトラベローグ 1

姫ノ木あく



OVERLAP



キラキラと淡く煌めく金色の糸が漂っていた。

手を伸ばせば届きそうな場所に、ゆっくりと、誘うように揺らめいている。だが、その糸に触れることはできなかった。

手を伸ばしても、ユラリ、ユラリと揺らめいて、掠ることさえ許されない。

キラキラ、キラキラ、キラキラ。

それでも糸は煌めいて、妖しく誘い続ける。

この糸はどこに繋がっているのだろうか？

糸が繋がる先に意識を傾けると、深く暗い闇がぼっかりと口を開けていた。

糸はその穴の向こう側にまで繋がっているのだろうか。

いつしか意識は、そのひと筋の煌めきを辿って闇の中へと入りこんでいた。

深い深い闇を掻きわけて、進み、潜りぬけ、加速していく。

やがて、糸の煌めきは徐々に強く、徐々にその範囲を増していき、糸から束へ、束から

光の泉へと変化していった。

そして、その光の中へ、否、暗闇の外へと飛び出す――

雄大な自然が広がる渓谷に閃光が迸り、凄まじい轟音が響き渡った。

轟音は『世界の裂け目』とも謂われるその二つの岩壁の間をどこまでも反響していく。アエテルナミアと呼ばれるこの世界を、太古の昔から見守り続けてきた古き妖精の一族。その一族を統べる『評議会』の一員であるジルレアルレンサスは、自らの血族である金髪の少女を押しやって叫んだ。

「我らがここを食いとめる！ おまえは先に行け！」

「ですがジル！」

「行け！ 『グレイテストフォール』がその口を開けている間に、『因果の糸』を追うんだ！」

評議員がそう叫んでいる間にも、再び轟音が鳴り響き仲間のエルフたちの悲鳴があがっていた。選りすぐりのエルフたちが張った魔法防壁をも容易に貫いていく凄まじき雷光。その得意の魔法を以て二つ名とする黒き妖精は、恐るべき四人の仲間を率いて、捜索隊の本隊であるジルレアルレンサスの間近まで迫ってきている。

「行くんだ！ 失われし『アエテルノミコン』を取り戻し、この世界を滅びの運命から救ってくれ！ 頼む！」

大きな羽ばたきの音と共に、こぼれ差していた陽光が覆い隠される。鹿の頭と四肢を持つ異形の怪鳥が二人のエルフの姿を見つけて、高い嘶きをあげた。

「いかん、彼奴らのペリュトンに見つかったか！」

エルフは金髪の少女を突き飛ばして叫ぶ。

「さあ、行ってくれ！ おまえだけが我らの希望なのだ！」

少女は唇を噛んでうなずき、深い暗闇の中へと入っていった。

背後から聞こえる轟音にも叫びにも首を振り、唯一の道しるべである金色の糸を頼りにより深い暗黒へ、より暗い漆黒へと足を速めた。直線状とも螺旋状とも思えるその道筋をひたすために、ただひたすらに走り抜ける。

本来は巨大な瀑布であるはずのこの場所は、数百年に一度その水の流れがとまり、どこまで続くともされない深淵が出現する。『因果の糸』は、その奥に『アエテルノミコン』に繋がる因果があると告げていた。

少女の知る限り、この奈落に入りこんで帰ってきた者はいない。

だが、『アエテルノミコン』を見つけれなければ、少女も、少女の住むこの世界も、すべてが滅んでしまうのは必定だった。

金髪の少女は躊躇することなく暗闇を掻きわけ、振りかえることなく突き進む。自分がなにをすべきか、なにをしなければならないのかを、彼女は明確に理解していた。

——『因果の糸』を追い、『アエテルノミコン』を見つけ出す。

その強い信念の下、少女はただひたすらに暗闇に漂う金色の糸を追っていった。左右どころか前後も上下の感覚すらもなくなっていく暗闇の中、揺らめくひと筋の糸だ

けを頼りに走り続け、走り続け、そしてまた走り続けていく。

この暗闇は永遠に続くのかと思われたその時、糸が示す先で、糸の光が強まったように見えた。

いや、気のせいではない。『因果の糸』は、この暗闇の向こう側にある光の方へと繋がっているのだ。

これまで走り続けてきた疲労に足元がふらつき痙攣するが、少女はそんな自らの脚を叩いて拍車をかける。

「あそこに、あります」

やがて、糸の煌めきは徐々に強く、徐々にその範囲を増していき、糸から東へ、東から光の泉へと変化していった。

少女は意を決して、その光の中へ、否、暗闇の外へと飛び出す。

いったいどこへ出たのだろうか。

飛び出した先はあまりにも眩しくて、少女はしばらくの間、なにも見ることができずにいた。ただ、その肌日光の暖かさと柔らかくそよぐ風が感じられる。

『グレイテストフォール』の向こう側に出てきてしまったというのか。だが、それにしても空気が違いすぎる。

そうしている内に、眩んでいた目が徐々に回復してきた。

ゆっくりと臉を開くと、そこは小高い丘のようだった。

変わらずに『因果の糸』が漂っていることに安堵し、その先を見晴らすと、壮大に広がる街のようなものが見えた。

この様な場所にあんな広大な人間の街があっただろうか。

少女が状況を確認しようと即座に『遠見』の呪文を唱えると、遙か先までの光景が鮮明に見えはじめた。

その光景にしばしの間少女は絶句する。

それは、少女がはじめて目にする街並みだった。

見たことはおろか、聞いたこともない文明、その様式。

その街並みは途切れることなく、どこまでもどこまでも広がっていて、最初に少女が認識した広さなど、ほんの一部分にしか過ぎなかったことを思い知らされる。

しかも、そんな広大な街の中を、数え切れないほどの人間たちがそれぞれに忙しなく動きまわっているのだ。

驚くべきはその街の広大さと、人口密度だけではない。

天を突くほどに聳え立つ何基もの塔。

馬も繋がずに凄まじい速さで走る鉄の馬車。

幻術を映しだしている数々の石版。

その上空には鉄で作られたドラゴンが飛んでいた。

こんな高度な魔法文明を持った人間の国の話など聞いたことがない。もしあるとすれば、

人間のおとぎ話に現れる『失われた魔法文明』くらいのものだ。だがそれは、人間よりも遥かに古い歴史を持つエルフにとっては、荒唐無稽とも言える夢物語であつたはず。

では、今日にしているものはいったい——  
「あつ、待って！」

そんな光景に目を奪われていたのがいけなかったのだろうか。少女がそれまで追い続けていた金色の糸は、少女の余所見にへそを曲げてしまったかのように、遙か上空まで舞いあがり、こともあろうにそこぶつりと途切れてしまった。

途切れ、風に乗って飛んでいく糸に、少女は必死に追いつがる。途切れた端のもう一方がどうなったのかはわからなかった。

なにより、今し方抜けてきたはずの暗闇もどこに行ってしまったのだろうか。

それらの疑問に首を振り、ただひたすらに空を漂う糸を追い、その丘を駆けおりていく。少女の体力はもはや尽きかけていた。

それでも、あれを逃すわけにはいかない。  
少女は必死にその手を伸ばす。

その手を——

## 第一章

### 俺の行動班はツッコミどころが多い

ガタンツ。

右手がなにかにぶつかった痛みに、弘武の意識が急速に取り戻されていく。突っ伏していた机から身を起こすと、前の座席——右手をぶつけた先だろう——に座っていた羽澄が呆れた顔で振り向いた。

「ようやくお目覚め？」

今はまだお昼休みのようで、教室内は喧騒に溢れていた。

昼食後に猛烈な睡魔に襲われて、そのまま机に突っ伏したんだっけ。弘武はまだぼんやりとしていた意識になんとかエンジンをかけて、現在の状況を把握した。

「んー、なんかヘンな夢見てた……ふああ……」

「よだれついてるわよ？ そんなにえっちな夢だったの？」

「いや、えっちな夢というわけではない……かな？ あれ？」

思い出そうとしてもまるで思い出せない。つい先ほどまではつきりと見ていたという感覚があつたのだが、いざ思い出そうとしてみると、まるで雲を掴むような感覚だった。

（夢の中でもそんなことがあつたような。なにかをこう、掴もうとして……）

右手を見つめて開いたり閉じたり。だが、何度それを繰り返しても、夢の記憶には届きそうにもなかった。

「手がどうかしたの？ 痴漢した夢とか？」

「違うっつの、失礼な。どんな夢だったかは忘れちゃったよ」

まあそんなところでしようとしても言わんばかりに羽澄は肩をすくめてフンと笑う。

反論したいのは山々だが、思い出せない以上それも難しい。

ただ漠然としたイメージとして、金色の糸のようなものが漂っていた記憶はあった。

（いや、糸じゃなくて髪の毛だったかな。金髪の女の子……しかも巨乳の美少女が出ていたような、いなかったような。ふむ、金髪巨乳美少女か。いいね、夢がある）

「弘武ー？ おーい、まだ寝てますかー？」

「すまん。起きてる起きてる」

そんなやり取りをしているうちに、始業のチャイムが校舎内に鳴り響いた。

ここは東京都内にある私立駒斑学園高等学校。

自由な校風と充実した設備、そして、かわいいと評判の女子の制服で、それなりに人気の高い高校の一つだ。

人気の集中に伴って偏差値は六十前後とやや高い部類には入っているが、進学校にはなりきれていない程度というのも『目指せるちよどよさ』という点で人気となるポイントなのかもしれない。

もともと、駒斑学園の二年B組に在籍するこの谷井弘武や椿沢羽澄などは、『家から近いから』という理由のみで入学を決めている。

伸びをして凝り固まった背筋をほぐしつつ教室内を見渡すと、チャイムはすでに鳴り終わったというのに、みな思い思いの場所でおしゃべりに興じたままだった。

元々騒々しいクラスではあるのだが、その騒がしさはいつも以上であり、活気に溢れているというよりも、テンションが高いというべきだろうか。

「みなさん、お静かに！ 矢場先生はまだ来ていらっしやいませんが、やることは決まっていますはず。各自、行動班で集まって、自由行動の最終調整を行ってください。日程の提出はこのホームルームの最後にしていただきますので、必ずこの時間の間に決めてしまうこと。よろしいですかね？」

そんな騒がしさを見兼ねて、クラス委員の花山院紅色がテキパキと指示を出した。

行動班とは、来週月曜日に出発する修学旅行における行動班のこと。それこそが生徒たちのテンションが高くなっている主な理由だ。

今年の修学旅行は奈良・京都・大阪という、定番ではあるが定番過ぎて今時の高校では逆に行かなくなってしまう感のある古めかしいチョイスなのだが、このテンションを見る限り二年B組においてはそんなことは些細な問題であるらしい。

「とはいえ、もう大方のことは決まっていたと思うのだがな」

曾根崎智郎が弘武の机に自分の机をくっつけてきながらそう呟くと、それを聞きつけた

羽澄が人差し指をチツチツと振った。

「そうでもないわよ？ 行く場所はだいたい決まってるけど、ちゃんと時間を合わせないと回りきれないと思う。東京ほどひっきりなしに電車やバスがくるとは思わないことね」「ハッハッハッ、その辺もタブにナビアプリを入れてあるからなんとでもなるぞ？」

智郎が最近買ったばかりのタブレットを自慢げに取りだして、鼻息を荒くする。そのメイン画面には一見シックなカラーの壁紙が設定してあったが、よくみるとかわいいうアニメキャラの女の子がパチリとウインクを決めていた。

「矢場先生ならその辺適当でも通るだろうけどな。念のため、そのアプリで今時間を調べようぞ？ 乗り換えなんかも計算してくれるんだろ？」

弘武のこの言葉に羽澄も智郎も「まあそんなところか」という様子で頷く。

行動班は基本的に男女三人ずつの計六人で構成されるのだが、人数の関係でどうしてもあまりというものは出る。弘武たちの五班は、女子は羽澄を含めて三人いるのだが、男子は弘武と智郎の二人だけという状態だった。

ちなみに弘武は、その五班の班長を任ざられてしまっている。

「そういうえば鼎はどこに行きたいとかあんまり主張してなかったよね。どっか行きたいところないの？」

「ボクはみんなど旅行に行けるなら場所はどこでもいいかな。羽澄に任せるよ」

塩見鼎が爽やかな笑顔ですべてを羽澄に押しつける。

鼎はボーイッシュな外見とそれに相応しい運動神経の良さで、一年生女子からの人気が高い少女だ。もっとも、人気の面では羽澄もそれなりに高く、そんな二人が親友同士としてしょっちゅう一緒にいるものだから、その方面を想像してキヤーカー騒いでもう困った下級生などもある。

弘武としては幼なじみである羽澄は元より、自分とも気兼ねなく話してくれる塩見鼎が一緒の行動班にいてくれるというのありがたい話ではあった。

「まあた鼎は人任せにしてー」

「アハハ、まあ肉体労働はボクが引き受けるからさ、頭脳労働はよろしく頼むよ」

鼎の苦笑いに羽澄がむくれている横で、智郎が自慢のタブレットを見つめて渋い表情をしていた。

「ふうむ、これは参った。樫沢の言った通りだな。一時間に一本とか二本とか」

「どれ」

大げさに肩をすくめる智郎からタブレットを向けられて、それを覗きこむ。

確かにバスや電車の本数が意外なほど少ない。効率のいい方法を考えないと乗り換え待ちだけで時間を浪費することは必至だ。

「頭脳労働はよろしく頼むよ」

と同じ言葉を繰り返す鼎に、親友の羽澄もさすがに呆れ顔だった。

「まあ、そういう頭脳労働はそこで寝てるヤツの専門分野だろ。おい、枕野」

「……………」  
返事が無いが屍しかばねではない。どこの屍しかばねがご丁寧まことに枕まくらを敷いて机に突っ伏しているというのか。

弘武はこの五班において最大の問題児と目している少女の肩を揺すった。

弘武も昼休みに寝ていたが、教室に枕を持ち込んでぐっすり眠るほど剛の者ではない。だが、この枕野なるあはそんなことは気にしない。余裕で枕を持ち込み、休み時間だろうが授業中だろうが構わずその枕に突っ伏して、安らかな寝息を立てている。

その肝の据わりっぷりに比べて、身体からだの方は椅子いすから垂らされた両脚がぶらぶらするほど小さいが、それもそのはず、枕野なるあは真正正銘まことまことの十歳児。

あまりの知能指数の高さに飛び級が認められて駒班園こまぐらにいるという特例の存在だった。堂々と枕を持ち込んでいてもなにも言われないのは、ひとえに教師たちも枕野てんさいなるあを扱いかねているからだろう。

「起きろ、枕野。出番だ」

「ん、むう……」

弘武が何度か揺るとようやく反応があった。

なるあは面倒くさそうにゆっくりと顔をあげて小さなあくびをこぼす。

「起きたか？」

「ん……………」

「なるちゃん、ファイト！」

目蓋まぶたが重そうに小さな手でコシコシとこするなるあを、羽澄はなみがこぶしを握りしめて応援する。

「とういわけで、自由行動時のスケジュールについての話だ。バスや電車の本数が意外に少なくてな、おまえの所見を聞きたい」

そんな羽澄を他所に弘武は状況を簡潔にまとめて説明した。この少女にはこれだけでも充分に話は通るだろう。

「……それを貸せ」

智郎がタブレットを渡すとなるあは手慣れた様子でそれを操作し、ひょいと返してきた。「こんなものだろう。これくらいはおまえたちでやれ」

十歳児とは思えない不遜ふそんな物言い。

弘武たちとも同級生とはいえ六歳程度の開きはあるのだが、同級生どころか教職員に対しても同様の態度を普段からとっている。扱いにくいと思われても致し方のないところか。

「舐なめんな。おまえも班員だろうが」

「ちっ」

「舌打ちかよ。態度悪いな」

弘武は小さな額を人差し指でぐいっとつつつき、なるあはやる気なさそうに押されるがまま顔を後ろに反らした。

「弘武ってなんやかんや言ってるちゃんのことよく構うよね。やっぱりロリコンなのかしら……」

「なるあちゃんも満更でもなさそうだしね。もしかしてふたりは……」

言いたい放題の羽澄と鼎に、さらに智郎が追隨する。

「ああ、弘武はロリコンだ。むしろガチペドと言ってもいい。ソースはこの俺」

「ふ・ぎ・け・ん・な！俺はどちらかと言えば金髪巨乳とかそういう方が——ハッ!?」

思わず先ほど考えていたことが口から出てしまい、弘武は慌てて口元を押さえた。

「金髪巨乳ときたかー」

「なるほど、谷井くんはそういう趣味だったんだ。金髪巨乳か……」

納得したのか呆れたのか、腕組みをしてうんうんとうなづく羽澄と鼎。

「もちろん俺は知っていたぞ？この前送ってやった画像もおまえの好みだっただろう」

先ほどガチペドとまで言った智郎までもが、その舌の根の乾かぬうちにしたり顔でそんなことを言っていた。

「いやな納得の仕方をすんなよ、おまえら！それに智郎からエロ画像を送ってもらった覚えもない！」

あるなら是非送っていただきたい！とは思っても、女子のいる前ではそういうことは極力口に出さないようにしている弘武である。

「ではせっかくだ。私の幼少期の写真をくれてやろう。ロリコンではないというのなら、

おかしなことには使わない」

「枕野は今が幼少期だろうが！っていうか、なにに使わせる気だ！」

かんべきかんべきの弘武の脳内を読み切ったかのようななるあのジョークに、弘武は顔を真っ赤にしてツッコんだ。

個性的な班員たちの顔ぶれに頭を抱えたくなる。

修学旅行に備えてタブレットを買ったほどのやる気を見せる智郎がいてくれるのが救いではあるのだが、どう見てもやる気のなさそうな枕野と、一見爽やかに笑っているがやはり乗り気でないところがあるところが垣間見える塩見は問題だ。

それに、やる気はあっても別の問題も——

弘武が羽澄に目を向けると、ついさっきまでいたはずの場所にその姿はなかった。

「椿沢さん！あなたは五班でしょう!?今は自分の班員たちと相談する時間です！」

「いやあ、わたしとこはだいたい終わったからさ。後のまとはめは班長がやってくれるし」

いつの間にか他の班が話しているところに交ざっていた羽澄は、いつもの様に委員長長の怒りを買っていた。

「だからといって、他班の邪魔をするのは言語道断。先生が来ていないからといって、このわたくしがそんな勝手を許すはずがありませんでしょう!?」

「邪魔をしてるんじゃないやなくて、ちょっと相談してるところを写真に撮らせてって交渉をし

ていただけよ。卒アル委員としては、修学旅行の準備をしているところもバッチリ撮っておきたいわけじゃない」

——それだ。

羽澄は機転も利くし行動力もあるしこの修学旅行に対するやる気も充分にあって、普通なら大いに頼れる仲間となるはずなのだが、『卒業アルバム制作委員』などという肩書きを持っており、この修学旅行で卒業アルバムのための撮影をしまくると宣言しているのだ。卒アル委員がクラス単位のものである以上、羽澄の行動は五班としての班行動を超えることが目に見えている。

こうなってくるとポジティブ要素であったはずの「機転が利く」「行動力がある」「やる気がある」がすべて班行動から逸脱する<sup>ネガティブ</sup>ための要素に思えてくるのだから不思議なものだ。「ともかく、あなたはさっさと元の席にお戻りなさい。いいですわね!」

「はいはい。はあ、まったくうちのクラスの委員長さまはぐちぐちぐちと——」

「なにかおっしゃいました!？」

「なんでもありません」

ちろりと舌を出しながら席に戻ってくる羽澄。

「おまえ、委員長相手だとなんでそんなに意地が悪くなるんだよ」

「あっちがわたしを目の敵にしているだけよ。降りかかる火の粉は払わなくちゃ」

羽澄は親指をべろりと舐めてから「フウ」となにかの構えをとった。

「それに紅色<sup>くさか</sup>のヤツ、あんなこと言ってるけど、わたしがデジカメ構えるとしつかりキメ顔するのよ? どんだけ目立ちたいんだっての」

「でも、羽澄もそれを撮っちゃうんだよね」

「鼎が口を尖らせている羽澄にすかさずツッコミを入れる。」

「……ま、紅色もクラスメイトだからね。卒アルに写真が載ってない子なんて一人も作りたくないし」

そんな二人の様子に智郎<sup>ともろう</sup>が思案顔で言った。

「なあ、弘武。よく椿沢と塩見の仲が取りざたされるが、椿沢の本命は実は——」

「曾根崎、それ以上言ったらアンタ、修学旅行に行けない身体にするわよ?」

「ヒツ!? そ、それだけのご勘弁を!」

拳を固める羽澄に顔を青ざめさせる智郎。

弘武はヤレヤレと肩をすくめながら、修学旅行で問題が起きませんようにと心の底から願っていた。

放課後——

「弘武ー、待ってー」

校門をくぐり抜けたところで、弘武は聞き慣れた声に呼びとめられた。羽澄だ。

「今日は一人なの? 珍しいじゃない」

「羽澄こそ、卒アル委員はどうした」  
「今日はないよ？ 明日は集まりがあるけど。そっちは？」  
「大悟がらーめん食いたがってたけど、パスした。旭人は部活だし、珍しく智郎が拒否っ  
たし」

「曾根崎ってそういうのも二もなくついてっちゃうイメージだったけど」

「だから珍しく、な。腹が減っていないときも稀まれにあるらしい」

そんな説明をしつつ、そのまま羽澄と二人、並んで歩く。

「修学旅行楽しみだよ。今日が木曜日でしょう？ 金・土・日で月曜日にはもう出発  
しちゃうんだ？ 準備はちゃんとできてる？」

「土日で準備すれば充分だろ。未開の地に行くわけじゃあるまいし、足りないものがあれ  
ばコンビニでもなんでも手に入る」

「それはちょっと油断が過ぎませんかね、班長殿」

羽澄はフンと鼻で笑った。

「修学旅行なんてちょっと油断してるくらいでちょうどいいんだよ。羽澄はどうせ山ほど  
荷物を詰めこんでるんだろ？ 小学校の時の様名なんてすごかったもんな。一人登山状態」

「あの時はわたし、ヒーローだったよね」

「みんな珍獣を眺める気分だったと思うんだが」

「ぶー。ひどいこと言うなあ、もう。おたまが足りなくて困っていたのは誰だれでしたっけ



ね

「使ってやらなきゃちょっとかわいそうかと思ってるな。幼なじみの気遣いってヤツだよ」  
 「まったく、ああ言えばこう言う……。その頭の回転をもっと有効活用したらどうなのよ。昔はわたしより成績だってよかったのにさ」

「なにげに現在のご自分の成績を自慢してるんですかね？」

「そういうひねくれた方向にばかり回転させるなって言ってるの。ま、確かに今の成績は弘武より断然上だけどね。それだけよ、それだけ」

「くっ、ムカつく……」

羽澄の自慢に弘武は歯がみするが、弘武の成績はそれほど低いわけではない。どの教科も総じて平均点を上回っており、及第点レベルと言って差し支えなかった。

羽澄にしても学年全体としては上位に入るものの、天才児・枕野まくのなるあと完全無欠の委員長・花山院かざいん紅色やその取り巻きを向こうに回しては分が悪く、上位にはいても決してトップにはなれないポジションである。

「それでも、弘武が本気出したら、わたしなんかより全然すごいと思うけどね。弘武は本気出すのがかっこわるいと思っちゃうおちやまだから助かってるわー」

「そんなこと思っていないっつ。羽澄は俺を買いかぶりすぎなんだよ」

「そお？」

「そうだよ。ま、お子様ってのは否定できないけどな。あのクソ坊主の息子だし」

「アハハ、おじさん相変わらずなんだ」

「ホント、いい加減落ちついてほしいものなんだが」

弘武がはじめて羽澄と会話を交わしたのは小学校に上がる少し前のこと。

羽澄が弘武の妹・瑛那えんなと意気投合してしまったこともあって、その時以来家族ぐるみでの付きあいがある。

「久しぶりに寄っていくか？ 瑛那も今年受験だしさ、勉強でも見てやってくれよ」

「んー、瑛那の顔も見ておきたいけど、今日はやめておく。修学旅行の準備もしなくちゃいけないしね」

「だから土日があれば準備には充分だと……」

「なに？ そんなにわたしを家に連れこみたいの？」

「いや、まったくそんなつもりはないが」

「ぶー、イケズー」

と言いつつ羽澄の方にもそんなつもりはまったくないらしい。それ以上気にする様子もなく、カバンからメモ帳を取りだしてファンフンとページを指先でなぞっている。

「うん、やっぱりちょっと必要なものがあるからやめておくれ」

「そのメモ帳、ちゃんと使ってるのな」

「まあねー。あの時ビュキーンってきた通りに、結構使いやすいくて便利な子なのよ」

羽澄はそう言うてにっこりと笑った。

羽澄と別れると、すぐに石造りの壁に囲まれた古びた小さな寺が見えてきた。  
「ちよいやあああああっ!!」

その境内に足を踏み入れた途端、弘武の背後から奇声があがる。

弘武は振り返りざまに自分に向かって振りおろされた竹箒を、冷静にカバンで受け、そのまま竹箒の勢いを外側に逸らしつつ、強襲者の脚をスココンと引っかけた。

「どわっ!?!」

弘武の目論見通り境内の敷石の上に尻餅をついて倒れたのは、困ったことにこの寺の住職であるところの弘武の父親・谷井醍醐その人だ。

「いい加減にしるよ、クソ親父。あぶねーだろ」

「だって弘武、最近父さんと全然遊んでくれないじゃん!」

「じゃんじゃねーだろ! 住職だろ!?! 坊さんだろ!?!」

「……弘武も父さんと一緒にスポチャンやろうよ」

「お断りします。それに竹箒で襲いかかるのはスポチャンじゃねえ。スポチャン舐めんな」

スポチャンというのはスポーツチャンバラのこと。

スポーツチャンバラのクラブが練習場所を探して困っていたので、境内の一部を使っていいことにしてあげた——まではよかったのだが、試しにやってみた醍醐自身がハマって

しまい、今や大会出場メンバーにまでなっている始末だった。

「とっとと起きあがって、その僧衣をどうにかしてくれ。瑛那が見たらなんて言うか」

「弘武が足引っかけたんじゃん!」

「親父が襲ってきたんだろが。俺は正当防衛!」

「なるほど、状況はわかりました」

正当性を主張した弘武の後ろからそんな声がかかけられ、醍醐は顔を青ざめさせた。

「げ……」

「瑛那、お帰り」

声の主は弘武の妹・谷井瑛那だった。

学校帰りに夕食の買い物も済ませてきたらしく、中学校の制服に学生カバンとスーパールのレジ袋といった姿だ。

「ただいま、お兄ちゃん。お父さんのことなんて放っておいてお家入ろ?」

「そうだな。ほら、そのレジ袋持ってやるよ」

「ありがとう、お兄ちゃん。いこいこ」

瑛那は弘武にレジ袋を手渡すと、空いた方の手を弘武の腕に絡ませ、未だ地べたに座りこんでいる父親に背を向ける。

「ちょっと瑛那さん!? 父さんを放っておくのはあんまりじゃないですかね!」

「……僧衣はちゃんと自分で洗濯すること。なお、クリーニングに出す場合は、自分のお

小遣いからどうぞ」

「ぬなっ!? え、瑛那っ! 父さん、今月はもう結構使っちゃってだな——」

「自業自得です」

「ご、ごめんない。父さん、ちゃんと反省しますから、許してください……」

瑛那は中学三年生にして谷井家のお財布と台所を預かる存在であり、醍醐や弘武のだからないところを叱責できる唯一の人間である。すなわち、谷井家で一番偉い。

娘に土下座して謝る親父を見て苦笑していた弘武だったが、その時、ふとヘンな気配を感じてそちらへと目を向けた。

境内の一角に淡いグリーンの光がぼんやりと揺らめき漂っているのが見える。

「お兄ちゃん、どうかした?」

「いや、なんでもない。今日の夕飯はなんだ?」

「白身のお魚が安かったから買ってきたんだけど、なんにしよう?」

「白身魚か……バター焼きかな」

「父さんは普通に塩焼きがいいかな」

「はいはい、お父さんの意見は僧衣そんえを洗濯したら聞いてあげますからね」

そんな話を続ける父と妹を先に行かせて、弘武はもう一度その緑の光に目を向けた。

ぼんやりと揺らめき、意志でもあるかのように時折不規則に明滅している。

この光がなんなのかは知らないが、弘武にしか見えていないだろうということは、弘武

自身がよくわかっていた。

弘武には昔から、こういうものが見えることがあった。

今ではすっかり慣れて、大して気にせず済むようになった弘武だが、小さい頃ころはこれのおかげでずいぶんと苦勞させられていた。

なにしろ寺の子である弘武が「ヘンな光が見える」などと言えば、子供たちの間ではどうしたって靈感がどうのという話になってしまう。

幽霊がいるのだと信じて泣き出してしまふ子もいるし、気味悪がって弘武を遠ざけようとする子もいるし、さらには弘武が狂言きやうごで徒に人を怖がらせていると怒鳴りこんでくる親や教師もいた。

結局、その頃弘武の主張を信じた——信じると主張した——のは、弘武の家族と羽澄はすみくらいのものであったのだ。

光が悪さをしたことは特になかったということもあり、弘武は徐々に「自分さえ黙っていればなにも起こらない」ということを覚えていった。

「あれが幽霊だなんて言った覚えはないんだけどな……」

「お兄ちゃん? どうしたの?」

「いや、やっぱりバター焼きだろう」

夕食のことを考えていた振りをしつつ、弘武は住居の玄関へ足を向ける。

——あの光。

ここも寺だけど、寺や神社なんかでよく見るんだよな。奈良も京都も寺社仏閣満載だから、たくさん見かけるかもしれないのか。どんなことが起きてても、焦らず騒がず、軽やかにスルーできるように心構えはしっかりとしておこう。



弘武が修学旅行での心構えを新たにしておいて家屋に入ってしまった数分後、境内に一人の少女が足を踏み入れていた。

長く美しい金色の髪に透きとおるような白い肌。

少女特有の甘さを残した顔の作りに、柔らかそうに弾む豊かな胸とキュッと締まったヒップラインが女性らしい色気を醸しだしている。

「ここ、ですね。ほんの少しだけですけれど……とても良質な……」

少女は両手を広げてなにごとかを呟いた。

この光景をもし弘武が見ていたならば驚いたに違いない。少女は弘武が見た淡いグリーングリーの光を包みこむように両手を広げていたからだ。

それだけではない。

グリーングリーの光は少女の眩きに感応するかのようにその光度を増し、そして、その次の瞬間には、少女の身の内に吸いこまれるかのように消えていった。

翌日の教室は朝から騒然としていた。

『修学旅行前、最後の平常授業の日だから』ではない。

『修学旅行前、最後の平常授業の日に海外からの留学生がやってきたから』だ。

美しい金色の髪をなびかせて、その少女は丁寧にお辞儀を試みる。

「ファルファリアルレンシアと申します。みなさん、お気軽にファルとお呼びください。よろしくお願いたします」

本当に留学生なのかと疑いたくなるほどの流暢な日本語と、その美しさ、その物腰の柔らかさ、そして、その豊かなバストに教室中の生徒たちが感嘆の声を漏らした。

しかし、その特徴的な長く途切れのない名前は、日本的ではないばかりか欧米的でもないなど弘武は思う。早口言葉か。

いや、そうじゃない。

そもそも弘武が気になっているのは、その長ったらしい名前ではない。

「うおおおっ！ すげえ美人だ!! ファルさん、是非お友達になってください！」  
なるほど、美人というのは重要なファクターだろう。だが、それを口に出してしまっ  
てからお友達になるのはなかなか難しいのではないかと弘武は思う。下心はちゃんと下  
に隠しておけ。

「きよ・にゅ・うっ！ きよ・にゅ・うっ！」

もつとも、あからさまに『巨乳』などというワードを口にしてしまうのは論外だろう。

巨乳自体はともとても重要なファクターであり、弘武もつい、シャツのボタンが弾け  
ちゃうんじゃないの？ というくらいの素晴らしい物体には目を向けてしまったわけだが、  
それも今回ばかりは問題にしたいところではなかった。

「静まりなさい！ ファルファリアルレンシアさんが困っているではありませんか！  
あなたたち、少しは恥というものを知りなさい！」

クラス委員の花山院紅色がクラスの面々を制する。

とはいえ、当の本人はとも困っているようには見えず、困るところか、そのふんわり  
とした笑顔をまったく絶やしてはいなかった。

その笑顔も初見用の作り笑いといった風ではない。教室内の反応自体を実に興味深く眺  
めているといった様子で、彼女がこのクラスのことをもつと知りたいと考えていることが  
手に取るようにわかった。

本題に戻ろう。

谷井弘武は修学旅行直前というこの時期になってやってきたこの留学生に、おそらくこ  
の教室中でもつとも不審の目を向けていた。

むしろ、なぜ教室内の誰一人、そのことを指摘しないのだろうかと弘武は訝しく思う。

その整った顔立ちの中にある違和感。

そこにこやかな表情の両脇で、ぴよこと楽しそうに跳ねている違和感。

確かにそれが彼女の美しさを損ねているわけではない。むしろ、その違和感部分も相  
まって美しいといってもいいだろう。素晴らしいバランスだ！

だがしかし、その上であえて問おう。

その長く尖った耳はなに!? なんかもうピ●コロ大魔王より長い感じの！

もつとはつきり言うとなんだ？ あれだ。出●裕がデイ●ドリットを描いて以来、日  
本ではすっかり定着しちまったあれだ！

**エルフ耳だ。**

ツッコむか？ ツッコんでいいのかわか？

いや、ツッコむなら登場した瞬間にツッコまなければいけない気がする。今さら  
ツッコむのは、完全にタイミングを外した感が凄まじい。

だが、修学旅行の直前にやってきた海外からの留学生に、登場早々誰がツッコめる？

しかも金髪巨乳の超美人。そういえば最近夢かなんかでそんなものを見た気がしない  
でもないがそれはそれとして、これにツッコめというのはいくらなんでも無茶ぶりが過ぎる

というものだ。

よし、そういうことならここは先に動いた方が負け。俺もこの場合はスルーで通すことにしよう。

この異常な状況への弘武の対応策は決まった。

——のだが。

「あー、この転入生は修学旅行からの参加となる。所属の班は……どうするかな」担任が面倒くさそうに後ろ頭を掻きながら教室内を見渡した。

「ま、まさか、一人足りないからってうちの班になるなんてことはないよな……」

「翔子ちゃんならあるんじゃない？ めんどくさがりだし」

弘武の呟きに前の席の羽澄が背中越しにこそこそと答える。

「先生、ファルファリアルレンシアさんは花山院家で預かっている留學生です。新しい環境では不安もあります。従ってわたくしの一班に所属させるのが妥当かと存じます」  
「んー、でもなあ」

紅色の主張に難色を示しつつ、矢場翔子は班構成のリストをしげしげと眺めた。

一班はすでに男女三名ずつの六名構成。となると一人足りない五班に組み入れられる可能性が高いのでは、と弘武は自分で嫌な予測をしてみよう。

「智郎、おまえはどう思う？」

弘武は小声で智郎に声をかけてから、ふと気がついた。

そういえば、エロ男子どもが叫んできるときに、珍しく智郎が加わっていなかった。金髪巨乳美少女なんてきたら真っ先に声をあげそうなのに。それに真っ先にエルフ耳にもツッコんで、蔑みを一身に浴びるのも智郎の役割のハズ……。

「うう……」

「智郎？」

低い呻きが耳に入り、さすがの弘武も心配になって智郎の顔色を窺うと――

「おい、智郎。おまえ顔真っ青だぞ……？ 大丈夫か、おい」

「す、すまん……ちよ、ちよっと、これはもう……ダメかもわから……ん……」

「智郎！ 智郎！ おいっ!!」

弘武の声のトーンに、転入生の話題で沸きかえっていた教室が一気に静まりかえる。その静寂の中、智郎は身体をくの字に曲げ、スローモーションのようにゆっくりと椅子から転げ落ち……そして、倒れこんだ。

月曜日の早朝。

集合場所の東京駅に向けて、弘武は家を出る準備をしていた。

「お兄ちゃん、はいこれ」

にこにこしながら瑛那が渡してきたのは小さな紙袋。どうやら中になにかが入っているらしい。

「おお、御守りか。ありがとう、瑛那」

「旅先ではなにかあるかわからないから、気をつけてね、お兄ちゃん」

なでくりなでくりと思わず妹の頭を撫でまわす。瑛那もにこにこ兄の所作を嬉しそうに受け入れていた。

「こっちは羽澄ちゃんの分ね。同じ班なんだよね？ ちゃんと渡してあげてね」

「羽澄の分もあるのか。わかった、朝のうちに渡しておくよ」

「うん、よろしく」

「よしよし、瑛那にはいいものを買ってきてやるからな」

「えへへ、やった。期待しておくね」

「父さんには!? 父さんにもいいものプリーズ!!」

いい子過ぎる妹とのやり取りに割りこんできた父親に目を向け、弘武はため息をつく。

「行くの寺とかだし、別にいらさないでしょ?」

「いるよ! おみやげを買ってくるっていう気持ちが大切なんだよ! 父さん美味しい酒とか買ってきてくれると嬉しいな!」

「了解。未成年の酒の購入は禁止されてるから、やっぱりなしってことで。それじゃあ、そろそろ出るよ」

「それ了解してないよ!」

「うん、お兄ちゃん。いつてらっしゃい」

「じゃあ瑛那、家のことはよろしくな? 行ってきます」

かわいいかわい妹妹と絶望に打ちひしがれてくずおれる父親に見送られて家を出る。

交差点で信号待ちをしている間に、弘武は瑛那からもらったばかりの御守りをポケットから取りだして眺めた。

「これも光って見えるな……」

弘武の目だけに見える緑色の光。瑛那からももらった御守りに込められたその光は、いつもよりなんだか温かなもののように思えた。

そういえば耳ばかりが気になってスルーしていたが、転入生の周りにも淡いグリーンの光が漂っていた。弘武がよく見る靄の塊ではなく、テニスボール程度の球体が肩口付近に

付き従う様に浮いて見えていたのだ。

「あ、弘武、おはよ〜」

そんなことを考えているとキャスターバッグが奏でるガラガラというBGMを伴って、羽澄が現れた。その音からして、かなりの重量がありそうだ。

「おう、おはよう。あ、そうだ。さっそくだけど、これ瑛那から」

「ほえ？ なんだろ」

「俺と同じものなら御守りだと思っけど」

「おお、さすが瑛那。よく気のつく子ね」

そう言いながらさっそく羽澄は中身を確認する。

「ホントだ、御守り。それと、なんか書いてある紙」

「紙？」

「うん——」

その紙を読んだ羽澄はギョツと目を丸くしてから、いそいそと元の状態にたたみ直し、御守りと一緒にスカートとポケットにギョツと押しこむ。

「なにが書いてあったんだ？」

「あー、あはは。『がんばってね』とかそんな感じのこと。受験生に言われたくはないわよねえ。そういえば、どっか学業の神様系あったわよね。お返しにそこで御守りとかを買ってくるのもいいかも」

「ああ、それでいいんじゃないか？」

「なによ、気のない返事ねえ」

「つつーか、集合時間に遅れないようにさっさと行こうぜ。ほれ」

「ほれ？」

「それ、俺が引っぱってやるからよこせって。重いんだろ？」

「あ、ありがと……。じゃあ、弘武のバッグはわたしが持つてあげる」

「俺のはたいして重くないぞ？」

「代わりに持たせるくらいさせてよ」

——しかし、本当になにをこんなに入れてくる必要があるというんだろう。

この重さから考えて、到底替えただけとは思えないのだが、そこにはやはり女子の秘密が隠されているんだろうか。第一着替えにしたって、修学旅行中は基本的に制服を着ているわけで、下着やシャツの替えくらいしか——待て。下着……。下着か。今、俺が運んでいるこのバッグの中には、羽澄のばんつやぶらじゃあが詰めこまれているというのか。例の巨乳エルフほどではないが、羽澄もその名に恥じないほどの元氣よく弾むほどよい大きさの胸を持っているからな。ちゃんとサイズに合ったぶらじゃあを用意しておくことは非常に重要なことだ。

「そうやって真面目な顔で黙ってる時は、だいたいえっちなことを考えてるんだよね？」

「な、なにを根拠にそんなことを」

「ふふりん、凶星でしょ？ わたしと瑛那の統一見解なのよねー」

弘武の中でスペシャルい子のハズの妹が、羽澄と一緒に邪悪な笑みを浮かべている姿が脳裏をよぎっていった。

「それでなにを考えてたの？ ファルちゃんのこと？」

「は？ なんて急に転入生が出てくるんだ？」

「だって、弘武の大好きな金髪で巨乳な美少女じゃない。物腰も柔らかいし、留学生なのに日本語もべらべらだし、物覚えもいいし、話しやすいし、優しいし、明るいし、そのくせほんわかしててちよっぴり危なっかしい感じがするのがまた母性本能をくすぐるっていうか——」

「なるほど、羽澄はそういう評価なのか……」

——緑の光はともかく、彼女の長く尖った耳についても誰も触れないというのは、いったいどういうことだ？ まさか、あんなにはっきりと見えているあの耳も、俺にしか見えていないということなんだろうか……。

そんな弘武の反応が意外だったのか、羽澄は拍子抜けしたように言う。

「弘武は違うの？」

「まだよくわからん。あの時は智郎のこともあって、バタバタしすぎてたしなあ」

「曾根崎もかわいそうよねえ。なんでこのタイミングで……。急性虫垂炎だっけ？ お見

舞いには行ったんでしょ？ 様子はどうだった？」

「看護学校を卒業したばかりの看護師さんがついてくれるかもしれないとか言ってたな。

大空を飛んでいきそうな勢いで『ナース！ ナース！』と叫んでもいた」

「……急性虫垂炎って盲腸のことだと思ってたけど、脳の病気だったのね」

「それと、『俺だと思って、せめてこれを活用してくれ』と、あいつのタブレットを預かってきてはいる。使い方知らないけど」

「基本的にスマホと同じでしょ？ って弘武そういえば未だにスマホじゃないんだっけ」そんな話をしつつ、最寄り駅から電車に乗り込み、集合場所である東京駅に向かった。

その中でB組が集まっている辺りを見つげ出すと、ちようど向こうも弘武たちを見つけ

たらしく、塩見<sup>しほみ</sup>がブンブンと大きく手を振った。

「おはよー、羽澄。谷井<sup>やい</sup>くんもおはよー。なんか重そうな荷物だね」

「おー、言っちゃれ言っちゃれ。この重そうなのは羽澄の荷物だ」

「これくらい女の子なら普通だっば！」

「あの一、羽澄？ ボクも一応、女の子なんだけど……」

と苦笑いしつつ鼎は床に置いていたバッグをひょいっと持ちあげてみせる。

旅行カバンというよりは、普通のスポーツバッグといったところだろうか。持ちあげてみせた時の重量感からしても、羽澄の荷物の半分の質量もないように思える。

「鼎は女の子として、もう少しがんばりなさい」

窘められるのは鼎の方になっちゃうのか。などと思っていると、鼎も同感だったようで、弘武と視線を合わせて肩をすくめる。

「みなさん、おはようございます」

少し離れたところから聞こえてきたその声に、弘武は振り返った。

——きた。エルフだ。

いや、エルフではないかもしれないがエルフのような耳を持つ金髪巨乳美少女転入生だ。ちなみに智郎のリタイアによって五班への参入が大確定してしまっている。

相変わらずテニスボール大の緑の光も健在だった。

なにあれ、シューティングゲームにおけるオプション的なもの？

相変わらずという意味では、やはりその胸の部分について言及せざるを得ないだろう。羽澄のおっぱいもそれはそれで元氣によく弾む素敵サイズだが、この転入生を前にしてしまつとさすがに霞む。制服がその胸の大きさにパツンと左右に引っぱられて来るのが一見ただけでわかるレベルだ。しかもそれが手を振りながら小走りに近づいて来るものだから、揺れるわ、たわむわ、たゆたうわ。いやあ、そうか。今までエルフ耳ばかり気にしていたが、気にするべきはやはりこっちか。どうやら俺が間違っていたらしい。こんなに動体視力を駆使せざるを得ないものがあるのだから、みんなが耳について言及しないのも宜なるかな。そうだな。おっぱいさえ素敵ならば、それはそれでもういいじゃないか。

おっぱいは世界に平和をもたらす。ビバ！ おっぱい！

転入生と挨拶を交わすはずが、いつの間にか世界平和に思いを馳せていた弘武だった。

「おはようございます。弘武さん、どうかさいました？」

「気にしなくていいわよ、ファルちゃん。弘武はえつちな妄想に浸ってるだけだから」

きよとんとしたエルフに、あまりにも的確な説明を加える羽澄。

「まあ、えつちな妄想ですか？ それは具体的にはどのような内容なのでしょう？」

「弘武、具体的な内容が気になるらしいわよ？」

「い、いや、ちゃうねん。世界はラブアンドピースやねん」

あまりの凶星に思わず大阪弁で意味不明なことを答えてしまう弘武である。

「ほら、やっぱりえつちなことだった」

「アハハ、ファルさんは美人だから谷井くんが見惚れちゃうのも無理はないよ」

鼎までもがうんうんとうなずき、弘武はこれ以上の反論を諦めた。

「そんなことより、後は枕野だ。どっかで寝てるんじゃないだろうな」

「誤魔化した……」

しつこい羽澄をギリギリと睨みつける。

「なるあちゃんならもう来てるよ？ って、あれ？ さっきまでここにいたのにな」

鼎がキョロキョロと周囲を見渡すと「わあっ」と声をあげて、慌てて走り出した。

その先には、ゆっくと転がっていくキャスターバッグがあり、その上には、死体のよ

うにだらんと四肢と二つのおさげを垂らしてうつ伏せになった枕野なるあが（もちろん眠ったまま）乗っかっていた。

新幹線には混乱のないように、予め決められた座席に着くことになっていた。

弘武は智郎の隣に座ることになっていたわけだが、それは自動的にこのエルフ（？）の隣ということになる。

「わたしは弘武さんのお隣ですね。よろしくお願いします」

「あ、ああ、よろしく」

窓側に転入生、通路側に弘武。通路を挟んで反対側に羽澄、鼎、なるあの席順だ。

「なんなら席替わる？ 通路側の方が羽澄たちと話せるだろうし」

「新幹線というのは、いわゆる電車という乗り物の一種なんですよね……」

「え？ ま、まあ、見ての通りだけど……。ええっとそう、すごく速い電車のことだよ」  
新幹線は日本固有と言っているいい交通機関。彼女の国にはそれに類するものはなかった可能性が高いと弘武は思い直し、なんとかたどたどしい説明をする。

「なるほど……」

本当にわかっているのかどうか、真剣な表情でうなずく転入生。さらには物珍しそうに

車内を何度も何度も興味深そうに見渡している。

肩口でピコピコと明滅している光のオブションについては、弘武はもう気にしないことにしていた。弘武としてもはじめて見る形態の光だったが、これらの不思議な光が視界に入っても気にしないでおくことに関しては、もはや慣れっこだった。

「で、席は……」

「あ、よろしければこのままでお願います。窓側の方がこういう風に動くのかよく見えると思いますが、それにお話なら弘武さんともたくさんしてみたいです」

「そ、そうか。じゃあ、そのままで」

「はい」

にっこりと微笑むファル……なんだっけ？ と弘武は悩む。

どうにも長くてまだ覚えきれていないのだが、果たしてどう呼んでいいものか。その覚えきれないフルネームを呼ぶのか、羽澄たちのように縮めて「ファルちゃん」とか「ファルさん」とか呼べばいいのか、苦肉の策で「君」とでも呼んでおけばいいのか。

「弘武、えっちなことは考えてないで、ファルちゃんとお話してあげなさいよ？」

「えっちなことは考えてない！」

横から口を挟んできた羽澄に反射的に返してから、今のは本当に考えてなかったよな？ などと自分自身に問い返してしまう弘武。

「ファルちゃん、弘武がなにか嫌なことをしたら遠慮なくわたしに言ってね？」

「しないっつの」

「フフフ。ご心配ありがとうございます、羽澄さん」

転入生の邪気のない笑みに毒気を抜かれたのか、まだなにか言いたそうにしていた羽澄も噴き出すようにして笑い出し、ヒラヒラと弘武に手を振った。

「……ったく」

「弘武さんは羽澄さんとは恋人同士なんですか？」

「ぶほっ！ けほっ、けほっ、けほっ」

「だ、大丈夫ですか？」

大丈夫とゼスチャードで応えつつなんとか呼吸を整えると、新幹線のドアが閉まる合図が鳴り響いた。ほどなくしてプシューというドアの閉まる音が聞こえ、新幹線はゆっくりと動きはじめた。

「羽澄とは幼なじみっていうだけで特別な関係はないよ。まあ、友達ではあるかな。小さい頃から仲がいいっていうのは否定しない。羽澄はうちの妹とも仲がよくて——って、聞いてる？」

「は、はい……」

話を振ってきたはずの転入生は、弘武の話を他所にべったりと窓に張りついて、流れる景色に見入っていた。

「すごい……」

「確かに速いとは思うけど……君だって日本に来るときに飛行機で来たんだろ？ そっちの光景の方がすごかったんじゃない？」

「飛行機？」

転入生はバツと弘武の方を向いて、興味深そうに目を見開いた。

「え、乗ったことない？」

「ええ、ありません。弘武さんの言葉から察すると、空を飛ぶ機械での輸送手段がある、ということなんじゃないか？ あ、もしかして、あの時の……」

「ま、まあ、そんな感じだけど……。あの時？」

「いえ、先日空を飛んでいる物体を見かけたものだから」

「な、なるほど……」

空を飛んでいる物体。ときたか。

弘武はそのやり取りに潜む、凄まじい違和感に眉をひそめた。

「自動車という乗り物もはじめて乗せていただいた時にもものすごく感動しましたけど、この世界の人たちの輸送技術というのは素晴らしいものがありますね。わたしは驚かされることばかりです」

「自動車も乗ったことがなかったのか……。っていうか、日本にはどうやって来たんだ？ 船？」

——ちよっと待て。今なにか、彼女の台詞の中におかしなものが入っていないかったか？

「この世界の人たち？」

「この国の人たちの輸送技術は素晴らしいと思います」  
 につこりと微笑む金髪の少女。

（言い間違え、だよな？ さすがに……。まさか、本当に『異世界から来たエルフ』などというファンタジーはあり得ないだろう。現実はラノベじゃない。そんなファンタジーあり得ません！）

内心の動揺をなんとか抑えこんで弘武は会話を続ける。

「で……。君は日本にはどうやって来たんだ？」

「……………ふ……………ふ、船……………です」

（今、超目を逸らしながら言われたんですけど！ 絶対ウソな気がするんですけど！）  
 募りまくる不信感に弘武の目頭が熱くなってきた。

「ち、ちなみに、どんな感じの船で？」

「ど、どんな感じ……………ですか？ えっと、その、が、**ガレー船**！」

「ガレー船!？」

「あっ、ガレー船ではおかしいですか!? あ、あのつ、じゃあ帆船はんせんで！」

その答えに、弘武の脳内ではテキサスなプロレスラーが丸太のような左腕を振り回した（ギャグ！ ギャグだろう、これは！ 彼女の故郷ではこれが面白いに違いない！）

そう無理矢理自分を納得させた弘武だが、とりあえず船のことどころか彼女の故郷のこ

などにも聞かないことにしようと思いついた。見えている地雷を踏み抜く趣味はなかった。

「弘武さん見てください！ ものすごい速さで景色が流れていきますよ！」

彼女も話題を切り替えなければマズイと思っただろう。突然そんなことを言いだした。「あ、あの……………わたしはまだこの国に来てから日が浅くて……………右も左もわからない状態なんです。図々はなはだしいお願いなんです、よかったら弘武さん、わたしにこの国のいろいろなことを教えてはくれませんか？」

「ああ、もちろん、俺でよければ。それに羽澄はなはや塩見しほみも気のいいヤツらだから、いろいろ聞いてみるといい。枕野は……………まあ、だいたい寝てるが、起きていればコンピューター並みの精度で答えてくれると思う」

「コンピューター……………」

（いかん。またなにかおかしなところに踏みこんだ）

弘武はわりと勘の鋭い方だった。

「そういえば弘武さん」

「な、なんででしょう？」

思わず敬語になる弘武。

「わたしの名前はファルファリアルレンシアです。呼ぶのには長いと思いますのでファルと呼んでくださいね」

「自己紹介はもうしてもらったと思うけど」

「そうですけど……弘武さん、もしかしたらわたしの呼び方に困っているのではないかと思います」

弘武に負けず劣らず、彼女もなかなか勘の鋭い方らしい。

「えっと、じゃあ……ファルさん」

「ファルで結構ですよ？ 弘武さんは先ほど五班の皆さんの名前を全員呼び捨てしていました。わたしも五班の一員なので、是非呼び捨ててお願いいたします」

「いいのか？ ああ、でもさすがに馴れ馴れしすぎるのもアレだから、せめて苗字——ファミリーネーム？ とか……」

「いえ、説明が難しいのですが、ファルファリアルレンシアという名前の中に血族やその根となる地<sup>ル</sup>の意味も含まれているんです」

「根となる地？」

「血族の所属する地域……とでも言えばいいんでしょうか。正確に該当する言葉がないのか、少し翻訳が難しいようです」

「……誰か別の人が翻訳してるの？」

「……………」

（しまった。また踏みこんでしまった）

「ふアツ、ファルデ、結構ですよ？」

（誤魔化したー!? しかも微妙に声裏返ってるし。怪しい。怪しすぎる……）

そして、ここまでなるべく気にしないようにしてきた弘武だったが、どうしても気になつてしまう事象もあった。

（ファルの肩口にあるオプシジョン……説明が難しい言葉が出るたびに、激しく明滅しているような……。「少し翻訳が難しい」と言ったときなんか、一瞬赤く光ってたし）

弘武の訝しげな視線にファルは緊張した面持ちを見せる。

弘武は数秒の間、じっとファルを見つめ、ファルもまた頬を引きつらせつつも目を逸らさずにいた。

（まあ、悪いヤツではなさそうなんだよな。俺がヘンな光が見えることをみんなに黙っているように、この子にはこの子の事情があるのかもしれない）

「わかった。じゃあ、ファルって呼ばせてもらうな？ よろしく」

「はい、弘武さん」

ホッとした様子でファルは微笑む。

「そういえばファルちゃんは、史跡や寺社仏閣に興味があるらしいわよ？ 弘武が教えてあげるといいんじゃない？」

そこへ突然、通路越しに声がかかった。

「なにをいきなり」

「なんかおしゃべりが盛りあがってるみたいだから、さらに話題を提供してあげようと思つて。あら、お邪魔だったかしら？ うふふ」

「うふふじゃねえ」

羽澄の向こうを見たら、常に寝ているなるあは元より、鼎なべも目を閉じてしまっているのが見えた。相手をしてくれる人間がいなくなつて暇になつてしまつたらしい。

「弘武さんは史跡や寺社仏閣に詳しいんですか？」  
「!?」

ファルが弘武の方へ身を乗り出してきた瞬間、その腕がたとえようもないほどに幸せて柔らかな感触に襲われた。

**(おっばい、当たってる)**

「弘武のうちはお寺さんなのよ。おじさんが住職でね。ね、弘武」

「お、おお……」

(おっばい、当たつたままなんですか!? 指摘をするべきだろうか? いや、この状況に羽澄はまだ気がついていない。指摘をすれば必然的に羽澄にも知られることになり、理不尽な怒りを被かつてしまう気がする!)

「そうだったんですか。お寺というのは、仏教という宗教の施設ですよね? では、弘武さんも仏教徒なのですか?」

弘武の苦勞を知つてか知らずか、さらに興味深そうに弘武に身を寄せるファル。

「い、いや、その辺は好きにしろつて、お、親父おやぢからは言われて……」

(柔らかい。すげえ柔らかい。それにあったかい)



緊張に口内が乾きだし張りついて、弘武の舌は微妙に回らなくなっていく。

「なに弘武、今さら緊張してるの？ さっきまで普通にしゃべってたじゃない。それとも乗り物酔いとか？」

（乗り物酔い！ そういうものもあるのか！ ここは乗り物酔いということにして、一時トイレに撤退という選択肢もあるわけだ！）

だが、弘武がその選択肢を選ぶ前に、事態はまた新たな局面を迎えることとなった。

「あ、富士山だー」

女子の誰かが放ったその一言により、一斉にクラスの三分の一くらいが窓際による。

「ファルちゃんの窓の方よ、ほら、あの山。あれが日本で一番高い富士山っていう山なの」

「わあ、綺麗な山並みですねー。なんだかとても女性らしいとおやかさがあるというか、美人さんという印象です。素敵……」

「ファルちゃんなかなかわかってるわね。たおやかなって言葉、日本人でもなかなか出せないわよ。うんうん」

したり顔で言っている羽澄だが、弘武の方はそれに取っついていない場合ではなかった。ファルが景色に釘付けになったことにより、弘武の腕はその素敵ワンダフルな感触から

解放されたのだが、今度はファル側の窓を覗きこんだ羽澄の胸が、弘武の眼前にある状態となっていたのだ。

胸ばかりじゃない。

羽澄自体の距離が近すぎて、羽澄の匂いが弘武の鼻腔をくすぐっている。

「お、おい、身を乗り出しすぎだ」

「おっと、ごめんごめん。弘武も見たかったよね？」

（そうじゃねーよ！ 脇の下ペロペロしてやろうか!? ああん!?)

などとは言いたくても決して言えない弘武である。

「弘武さん、どうぞ」

（どうぞって身を反らされても、おっきなおっぱいが突きだしてるみたいになっちゃってるんですが。下手したら、そこに手をついちゃいそうで怖い！ ついちゃいたい！）

羽澄監視下でそのような暴挙に出る勇氣はとも持たず、弘武は適当に富士山の姿に感心した素振りを見せてその場を乗り切った。

その後、京都に着いた弘武たちは、新幹線から私鉄に乗り換えて奈良に向かった。

日程上、明日にはまた京都に来ることになるのだが、今日明日は奈良めぐり。

「この修学旅行という行事そのものも大変興味深いです」  
狭いボックスシートに枕野なるあ以外の四人が膝を揃える中、ファルが新幹線での話の

続きとばかりに口を開いた。

ちなみになるあは相変わらず寝ているが、隣のボックスシートで担任の矢場翔子やばしろうこの膝枕という剛胆ぶりだった。翔子は翔子で、普段通りのつまらなそうな表情ではあったが、その手はなるあの柔らかな髪の毛をしきりに撫でさすっており満更でもなさそうだった。

「ファルさんの国では修学旅行行っていないのかな」と鼎。

「ええ。ちょっとした遠足みたいなものはありますが……野外学習、みたいな感じですね」「ふむふむ」

ファルの答えに鼎は興味深そうにうなづく。

「そもそもこの学校のように、こんなに大規模な人数での授業は行いません。一人の教師に対して生徒は一人からせいぜい五人くらいまででしょうか……」

「いいなあ、それ。教える方も教わる方も、そっちの方が楽し身も入りそうな気がする」「学習効率という意味ではそうだと思います。ただ、どちらにもメリット・デメリットはあると思いますよ？ それにわたしとしては、こんなにたくさんの方たちと一緒に旅をするというのがとても興味を惹かれて……。こんな人数での遠征など、平時では考えられませんが」

ファルが口にした「平時」という言葉から、弘武はファルの国ではその逆の状態が普通なのではないかと想像した。平時の逆、すなわち戦時。戦争ならば、大人数での遠征というのもおかしいことではない。

日本に住んでいると忘れがちだけど、世界的に見たら今、戦時である国も稀まれではないのだ。

もっとも、ファルが普通に他の国の人だったとして、だが。

お昼前に近鉄奈良に到着して、そこから徒歩十分の距離にあるホテルにぞろぞろと移動する。

「さて……」

そんな中、鼎は肩にかけていたバッグからつばの広い帽子を取り出し、日射しを避けるためだろうか、やけに目深にそれを被った。

「お、塩見しほみの帽子姿なんてはじめて見た。意外と似合うな。かわいいかわいい」

「か、かわいい!? あ、アハハ、結構日射しが強いみたいだから、い、一応ね、一応……」

弘武の率直な感想に、鼎は赤くなった顔を誤魔化すように笑う。

「谷井、押してくれ」

弘武の足元から声がしたと思ったら枕野なるあだった。

なるあが持つキャスターバッグは、羽澄のような気合の入った大きさのものではなく、どちらかと言えばご老人が買い物に持っていったって、あるときは椅子代わりに腰をかけることもできるようなタイプだ。

そんなキャスターバッグに乗って、弘武にこれを押せなどと命じている。元より誰かに運ばせるためにこんなバッグを選んできたのだろう。

「わかった、押してやる。ただし、俺がこの修学旅行でおまえを運んでやるのは、合計で三十分とする。それでは——」

「ふう……仕方がない。歩くとするか……」

なるあはヤレヤレといった様子でキャスターバッグから下り、それを押して歩きだす。

「谷井くん、なるあちゃんの扱い方上手いよね」

鼎が帽子の位置をくいくいと直しながら苦笑した。

「いや、今ので最低でも三十分は運ばなくちゃいけないことにはなったんだよ。区切りをつけることで、被害を最小限に食いとめてみようという作戦だな」

「うん、それを扱い方が上手いって言うんだと思うよ。それから、その……」

「ん？」

「帽子、かわいって言ってくれて、ありがと」

「お、おう」

そんな一幕もありつつ、今夜の宿泊先のホテルにたどり着いた弘武たちは、荷物をひとところに置いて、ホテル内のお食事処に集合した。

ここでお昼ご飯を食べつつ先生方からの注意事項等の連絡を受けて、その後解散。そこ

からはお待ちかねの班行動ということになっている。

「ごはんが素晴らしいと思うんです」

茶碗に盛られた白米を前に、これまで以上の真剣さでファルがそんな主張を口にした。

「わたしはこの世界にきていろいろなことに驚かされましたが——」

「この世界？」

「わたしはこの国にきていろいろなことに驚かされましたが、このごはんという食文化はもうこれ以上ないくらいに素晴らしいと思いました」

弘武のツツコミに冷静に言い直すファル。そして、さらに熱を持って続けていく。

「このほかほかの温かさとおつくらとした柔らかさ、噛めば噛むほど広がる優しい甘み……。本当に最高です。あの『炊く』という調理法も素晴らしいですね。とりわけその『炊くこと』に特化したあの『炊飯ジャー』という装置の性能ときたら——」

キラキラと瞳に星をちりばめながら、ファルはなおも続けた。

「ごはんがあまりにも美味しかったので、どうやって作っているのかと思ひまして、紅い色さんのおうちで伺ったんです。そうしたら、『普通に炊飯ジャーで炊いているだけ』だと！不躰とは思いましたが、是非それを見せてほしいと頼みこみまして、その極限まで計算され尽くした炊飯ジャーの仕事ぶりを、思わず一日中観察してしまいました」

弘武には花山院紅色が困っているところなど想像もつかなかったが、その時ばかりはさすがに困っただろうとの予想はできた。というか、なにを言ってるんだこのエルフは。

ただわかるのは、のほほんとしているように見えて興味のあることに対しては一気に燃えあがるタイプだろうということか。わりと情熱家なのだろうと弘武はファルを分析した。「ごはんを語るなら、まずは米を語るべきだろう。日本人が如何にして米を品種改良してきたか興味はないか？　ファルファリアルレンシア」

さすがに飯時には起きていたなるあがそう言ってニヤリと笑みを浮かべる。なにげにファルのフルネームをさりとってのけるあたり、やはり天才児というところだろう。

「興味あります！　すぐ興味あります！」

「まあ、米については二人の時にでもじっくり話しあってくれ。ぶっちゃけ、今日の班行動に米はまったく関係ない」

「なっ——」

ファルとなるあが同時に絶句して、弘武に向かって目を見開く。

「そんな目をされても、昼飯食ったらすぐ行動しないとイケないし」

「あれ、そんなに時間ないんだっけ？」

「明日香村までそれなりに移動時間がかかるから。それに檀原神宮が四時、二面石のある橋寺が四時半、飛鳥寺が五時十五分に閉まるから、それまでに回らないといけない」

「ちよっとちよっとー。なんで初日からそんな強行ルートなのよ」

「確か羽澄の提案だったと思うけど？　ね、谷井くん」

羽澄のブーイングに鼎がさらりとツツコミを入れて弘武をフオローした。

「ありがと塩見、その通り。二日目に奈良公園を回る班が多いからってことで、いろんな班の写真を撮りまくりたいと羽澄が主張した」

「ですよー。あ、弘武、おかわりいる？　ごはんよそってあげちゃう」

酷い誤魔化し方をする羽澄だった。

昼飯を食べ終わると弘武たちはホテルを出て、来た道を戻る形で駅に向かっていった。

奈良の街並みはどこも綺麗に舗装されている印象で、歩道も広く大変歩きやすい。

遮るものが少なく直射日光を受けやすいので、鼎のようにつばの広い帽子を用意してくるのは一つの正解なのだろう。

もっともその鼎は、そんな帽子を被っているにもかかわらず、道端ギリギリの建物の陰になっっているあたりを歩いていた。

「そーいや羽澄、さっき委員長にまたなんか言われてたな」

「ああ、あれねー。ファルちゃんは紅色んちのお客様だから、なにかあったら許さないとかなんとか。『ファルちゃんはもう五班の子だから、お気遣いなく』って返してあげたわ」

「いい返しだ。ナイス」

「どもー」

弘武からの褒め言葉に上機嫌に応える羽澄とは対照的に、ファルが申し訳なさそうに言ってくる。

「ごめんなさい、羽澄さん。紅色さんも決して悪気があるわけではないと思うんです。わたしも紅色さんには本当にお世話になっていて——」

「ああ、大丈夫大丈夫。ファルちゃんが気にすることじゃないわ。いつもの話」

「委員長と羽澄は天敵同士みたいなのだからなあ」

「同じじゃないわよ、弘武。わたしが一方的に絡まれてるだけ」

そんな羽澄の嘆息に弘武は肩をすくめてみせた。

過去に一度だけ花山院紅色より成績がよかったことがあり、それ以来羽澄は目の敵にされていた。そんなことを言ったら、枕を抱えたまま歩いているこっちの幼女の方を目の敵にしると言いたいところだと、弘武はなるあに目を向ける。

「っつーか、なんで枕抱えてるんだよ」

「……枕が変わると眠りにくいじゃないか」

そんなこともわからないのか、かなりの呆れた目を向けてくるなるあ。

「だとしても寝るのは夜だろ。ホテルに置いておけばよかったのに」

「はあ……」

聞こえるくらいの大きなため息に、ヤレヤレと言わんばかりの首振り。

いつでもどこでも寝る気満々だな、こいつ……。

ため息をつきたいのは弘武の方だった。それも思いつきり盛大に。

「谷井、おんぶ」

「もう駅そこだよ！」

「ちっ」

「だからその舌打ちやめろ」

「あら、鼎さんは……」

弘武がぐりぐりとなるあの額をつついてしているとファルがふと辺りを見まわした。

「あれ？ いない？——って、あんなところにいたわ。かなえー、離れすぎー」

「羽澄！ しーっ！ しーっ！」

羽澄の声に慌てて駆けより必死に人差し指を立てる鼎。

「なによ？ そんなに慌てて」

「い、いやっ、こんなところで大声で名前呼ばれたら、恥ずかしいじゃないか」

「んん？ 鼎だつて、いつもわたしのこと大声で呼ぶじゃない」

「それはその……東京にいるときと、旅先では違っつていうか……」

「塩見、今の場合、離れてたおまえの方が悪い」

「うっ……ま、まったくその通りです。ごめんね、羽澄、谷井くんも」

「これから気をつけてくれればいいよ。おっと、ここから駅に下りられるみたいだな。入っちゃおうぜ」

近鉄奈良から一度乗り換えを挟んで橿原神宮へ向かう。

班行動時の交通費は自腹となるのだが、後日、修学旅行でのまとめを発表する際に、か

かった交通費なども発表する必要があった。

そういうわけで、使った交通費などは羽澄にメモっておいてもらうことにして、弘武はミスがないように班員分の切符をまとめて買ってそれぞれに手渡した。

「はいファルも切符」

「切符……」

渡された切符をじっと見つめるファル。「この小さな紙切れでいったいなにを？」とでもいわんばかりの表情だ。

「わかるか？ 自動改札のこの口に、この切符を入れて——こっち側で受けとるんだ」

「な、なるほど……」

シユコン！ と音を立てて切符を呑みこむ自動改札機にビクリとしつつもなんとか改札をくぐり抜けるファル。駅員さんの訝しげな視線が若干痛いのが、外見上明らかに外国人であるためか、それ以上のリアクションはなかった。

「つまり、この切符というのは、電車という乗り物に目的の場所まで乗ることを許可する、許可証のようなものということですよ？ この機械は、切符に書かれている目的地やそこまでの値段を確認していると言うことなんでしょうか？」

「その理解でいたいあつてる」

「すごい仕組みですね……。驚愕することばかりです」

ファルは自動改札の仕組みにしきりに感心していたが、弘武もファルのその理解力に舌

を巻いていた。

新幹線からここまでの会話で、とにかくファルが元々いた国とは文化レベルがかけ離れているということは弘武はすでに察している。

その文化レベルの差異に不可解な点はいくつかあるのだが、それはひとまず置いておくとして、特筆すべきはやはり、その凄まじいファルの理解力だろう。

自分がまったくの異文化に放りこまれたとしたら、ここまでの理解と把握が即座にできるだろうか。それには枕野並みの天才的な頭脳が必要となる気がする。

なるあの方に目を向けると、電車に乗った途端いつもの様に寝はじめていた。

弘武の視線につられるように羽澄もそちらに目を向けて、満面の笑みを浮かべる。

「うわあ、珍しくなるちゃん寝顔が見えてる。かわいい。お持ち帰りしたらい」

「いつも突っ伏しちゃうってるから、なかなか寝顔は見られないんだよね。フフフ、本当にかわいいなあ」

羽澄の少々犯罪的な台詞に笑顔でうなずいている鼎。

こういう危ないロリコンがどこにいるかわからないので、班長もなるあから目を離すわけにはいかない。なるあは同級生だが、十歳児には変わりないのだ。

「気になっていたのですが、みなさん同世代の中、どうしてなるあさんのような幼い方が同じクラスにいるのですか？」

とファル。

「枕野は特殊事例だな。十歳児としては頭がよすぎたんだろう。俺も飛び級してきた以上の詳しいことは知らないけど」

「まあ、なるちゃんが小学校の授業を受けてるところなんて、ちょっと想像し難いかもね。わたしたちと一緒に高校二年生の授業ですら、なんにも苦労してないみたいだし」

羽澄が苦笑して弘武の説明を補足する。

「でも、ボクは授業の理解度だけが学校の意味じゃない気もするな。そう考えると、なるちゃんが小学校中学校を飛ばしてきちゃってよかったのかなって……」

鼎の意見に、ほんの一瞬しんみりとした間が訪れた。弘武はその雰囲気を取り払うかのようにならう。

「その良し悪しは俺にはわからないが、枕野は現に今ここにいるんだ。だったら、今一緒にいる俺たちが、意味のあるものにしてやればいいっていう話じゃないか？ もちろんそれは俺たちが枕野に与えてやるなんていう一方的な話じゃなくて、枕野にも俺たちの意味ある学校生活のために一役買ってもらうって話で」

「うんうん、さすが谷井くん、ボクたちの班長殿」

にこやかにうなずく鼎。そして羽澄もため息混じりに苦笑する。

「ホント弘武のロリコンぶりにはわたしなんかじゃどうしても敵わないわ。やっぱり、寝てるなるちゃんよだれをすくい取って舐める、くらいはしないとダメなのかしら……」

「俺はロリコンじゃないから！ っていうかなんで羽澄はロリコンの座を狙ってるんだ

よ！ どん引きだよ！」

しかもよだれをすくい取って舐めるとか、どれだけ上級者の発想なのか。羽澄は自分よしも遙かにエロいのではないかと思わざるを得ない弘武だった。

「だって、なるちゃんかわいし、弘武ってばなるちゃんに対して庇護欲全開だし、ロリコンもたまにはいいよねって思うじゃない」

「思わない！ っつうか、論理展開が明らかにおかしいだろうが。だいたい今の話はだな、枕野だけじゃなくてファルのような留学生にだって通じる話だろう？ 俺は最初からそういうつもりで——」

「素晴らしいお考えだと思います！」

「うお!？」

ファルの突然立ちあがったの賛同に、弘武はビクリとしてしまう。

「わたしも弘武さんたちの意味ある学校生活のために是非ともお役に立ちたいです！」

「お、おう」

さらにファルは弘武の両手を自らの両手で包みこみ、うんうんとうなずいた。

「ところでロリコンの谷井。榎原神宮前に着いたようだよ」

「起きてたのかよ！ っていうか、ロリコンは羽澄の方だよ！」

「いえーいっ」

修学旅行とはいえテンションが高すぎる羽澄に、頭が痛い弘武だった。

## 第三章

## うちのエルフは自転車に乗れる

駅に到着したのは午後三時少し前。四時には閉まってしまふ榎原神宮を先に見て回って、お参りを済ませた後、再び電車に乗って飛鳥駅あすかえきに向かう。

榎原神宮でも羽澄のテンションは高く、デジカメで巫女さんを撮りまくっていた。

「さて、自転車を借りるとするか」

「自転車……」

「ファルさんにはまだ説明してなかったかも。あのね、この明日香村には昔の遺跡が所々にあって、それぞれがちよつとずつ離れてるんだ。時間があれば歩いて回れないことはないんだけど、途中にある橋寺や飛鳥寺が閉まっちゃう可能性があるから、レンタル自転車を利用してそれで回ろうって話になっていたんだよ」

ファルは鼎なべの丁寧な説明にうんうんとうなずきを返しつつ、駅前をベルを鳴らしながら通っていった自転車にじつとその視線を向ける。

「ファル、自転車には乗れるか？ 回る場所をしぼって歩いていくという手も——」

「いえ、なんとかいたします」

「な、なんとかかって……」

「それって乗れないって意味じゃないの？」

絶句した弘武に羽澄も追従したがファルは、

「なんとかいたします」

と同じ答えを繰り返した。

ほんわかしているようでいて、わりと強情なところも見えるファルである。

「なんとかするということなら、とりあえずやらせてみるしかないか……」

「ありがとうございます。わたし、こう見えても乗馬は得意なので、なんとかなるんじゃないかと思えます」

「乗馬!？」

「やっぱり花山院かざんいんさんのところにホームステイしているくらいだから、お嬢様だったりするのかな」

羽澄が驚き、鼎がどこかの外れた感想を漏らした。

「ま、まあいいや。ともかく借りよう」

レンタルの自転車はどれもかなり年季の入ったママチャリばかりで、あまり選択の幅はなさそうだ。

「ファルさん、こんな感じで乗るんだけどわかるかな」

鼎がママチャリとは思えない軽快な乗りこなしを披露する。器用に重心を移動させて、ウィリーまでして見せた。

そんな鼎の芸を前に羽澄はづるが苦笑混じりにフォローを入れる。  
「ファルちゃん、ごめんね？ あんなウイリーなんかはしなくていいからさ」  
「あんな!？」

「これだけ使いこまれていけば、いけるんじゃないかと……」

「使いこまれていけば……?」

「ちよ、ちよっとだけ待っていてください!」

ファルはそういうとキョロキョロと辺りを見まわし、なにかを発見したのか突然自転車を引っぱって走っていった。

「おい、ファル!」

「ちよっとだけ! ちよっとだけですから、お待ちください!」

弘武の制止も聞かず、ファルは建物の陰に引っこんでしまった。

「使いこまれていけばって、どういう意味だ……?」

使い癖がついていた方が使いやすいということは実際にある。だが、弘武には、ファルがそんな観点で言ったようには思えなかった。

「ファルちゃん、おトイレ? ってわけじゃないよね……自転車も持っていつちゃったし」

「いや、全然わからない。ファルはファルなりに、なんとかしようとは思っているのだからうけど……」

羽澄にそう返しつつ、ファルが引っこんだ物陰を見ていたその時――

その物陰から放射状に淡い光がこぼれたのが見えて、弘武は息を呑んだ。

「どうかした?」

「ファルが行った方、なんか光らなかつたか?」

「んん? わからなかつたけど、車のミラーでも反射したんじゃない?」

弘武にしか見えない例の光だったのか、羽澄の言うようになにかの光の加減だったのか。光っていたのは一秒弱といったところだろうか。あまりにも短い時間の出来事だったので、弘武にも判別はつけられそうにもない。

「あ、ファルちゃん戻ってきた。しかも、ちゃんと乗ってる!」

「こ、こんなっ、感じっ、ですよねっ! は、はいっ、大丈夫ですっ!」

よたよたとしつつも、なんとか足はつけずに自転車に乗ってくるファル。

「おお、ファルさんいけるじゃないか。上手い上手い、その調子」

羽澄と鼎はファルの健闘ぶりを大絶賛だ。

確かに始めてですぐに乗れるようになったことを考えると、大変素晴らしい。

大変素晴らしいはあるのだが――

弘武はしきりに目を凝らし、何度も瞼まぶたをこすって、今一度、しっかりと自転車に乗ったファルを見た。

**なんかいる。**

「歯車とタイヤだけでこんな乗り物ができるんですねー。さあみなさん、わたしはもう大

丈夫ですので、さっそく参りましょう」

一メートル弱の光の塊——

目を凝らしてみると、なんだか人間のような形をしているようにも見える。

ファルの肩口に浮かんでいるテニスボールタイプの比ではない。

「弘武？ 行かないの？」

「あ、ああ……」

平然としている羽澄の台詞に、やはりこれは自分にはか見えていないもののだと知る弘武。

（あのサイズのぼんやりとした光自体は、今までも散々目にしてきたが、ここまではつきり人間の形と認識できたのははじめてだ。むしろ、今まで人間っぽい光を見たことがなかったから、俺が俺が見えているものを「霊的なものとは違う」と考えてきたわけだが、それが今一気に崩されたみたいだ。しかもだ——）

「あ、なるほど、そのバランスの取り方が重要なんですね？」

（なんかファル、その光としゃべってる気がする……）

この光景にさすがの弘武もパニックになりかけていた。叫び出さなかったただけ僥倖だ。なにを見ても軽やかにスルーするだけの心構えはしてきたつもりだったが、ここまでの事態は想定外。弘武は知らず知らずのうちに、胸ポケットにしまっていた瑛那えなからもらった御守りを握りしめていた。

そこから温かななかが伝わってくる気がして、徐々に気持ちが悪く落ちていく。

御守りに目を向けるとやはり柔らかく温かな光が息づいていて。

一つ大きく息を吸いこみ、そして吐きだす。

（少なくともこの御守りに込められた光は、よくないものじゃない。となれば、ファルの自転車に憑いている光もそうである可能性はある）

「谷井くん？」

「ああ、行く行く。すまん」

（ともかく害のあるものではない……のか？ 俺にしか見えていないものごとで取り乱したところで、ろくなことにはならないというのは人生経験上よく知っていることだ。ここは鋼鉄の心構えでスルーしよう！）

「よし——って、重い」

いつの間にか、なるあが弘武の自転車の荷台に乗っかっていた。ご丁寧に、持参の枕まくらは紐ひもで縛って背負っている。

「酷いことを言うな、谷井。私は十歳の女子としても軽い方に分類されるはずだぞ？」

「なんで俺のチャリの荷台に乗ってるんだよ！ 二人乗りは禁止です！」

「私は子供だから許される」

「そういうもの!？」

「それに、子供用の自転車がなくなてな。ママチャリでは、足が届かなかった……」

「それは……」

仕方なくなるあを乗せたまま自転車を走らせる弘武。なるあは確かに十歳児だが、同じ制服を着ていたらやっぱり注意されてしまうのではないかと気を揉みつつ、前方のファルに目を向ける。

やはり光る人型——背後霊かなにか？——が自転車を支えたり、ファルとなにごとかを話しているように見える。

「気にしない、気にしない……」

「ファルファリアルレンシアのことか？」

弘武のつぶやきを聞きつけて、なるあが背中から話しかけてきた。

「まあな。枕野は彼女の何をどう思う？」

「あの胸を枕にして寝たら、さぞかし心地良いだろうと思う」

弘武としても同意するしかない卓見だったが、そういうことが聞きたいわけではない。

「おまえはおまえで、ちよっと寝過ぎだろ。なんでそんなにどこでも寝るんだよ」

「フン……」

なるあは不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「谷井ならばナルコレプシーという病名を聞いたことがあるだろう」

「それは本人の意志とは関係なく突発的に眠りに陥ってしまう病気であって、いつでもどこでも寝る気満々でマイ枕を持参しているヤツとは無縁の病気だと思うが、それがどうか

したかか？」

「……ちっ」

——勝った。

「フフ」

自転車を漕ぎつつ勝利の笑みを浮かべていると、その背中からも嬉しそうな短い笑い声が聞こえてきて、弘武は首を傾げた。

「今おまえ笑ったか？」

「笑ってなどいない。それより谷井、次のところに着くまでいい。少し眠らせてくれ」

「結局寝るのかよ。落ちてでも知らんぞ？」

「ああ、しっかりと掴まっていることにする」

なるあは言うや否や、その小さい両手を弘武の腰に回し、その顔をピッタリと弘武の背中に押しつけた。

——イカン。

さすがに相手は十歳児とあって、こんなことでドキリとしてしまう弘武ではないが、こうして自分の背中に身を預けられると、どうしても庇護欲が湧きあがってきてしまう。

(もう瑛那もこんなことをしてくれる年齢じゃなくなっちゃったからなあ……)

ロリコンではないが多少シスコンであることは認めざるを得ない弘武だった。多少というか、はっきり言って多少どころではない程度には妹のことが大好きなのだ。実の妹であ

る瑛那のことももちろん大好きだったが、「妹的な存在」に対しても、それなりに心が動いてしまうのが弘武という男だった。

なるあの体温と呼吸を背中に感じつつ、前を行く羽澄たちを追いかけて吉備姫王墓<sup>きびひめのおきみのほか</sup>、鬼の雪隠<sup>せちん</sup>、鬼の炬<sup>まないた</sup>と巡っていく。これらの石造物は、それが作られた年代や目的、その形の意味などを考えるのは大変興味深いところなのだが、それら自体は見て写真を撮ってそこにある看板を読めば終了となってしまう、移動に次ぐ移動がメインという感じになってしまう。

「なんか山道の途中にぼつねんとあるだけなのね。周りは田んぼだし」

「観光の名所って意外とそんなものだよ」

羽澄のぼやきに鼎が諦観<sup>かたな</sup>したように答え、弘武もそれにうんうんと頷<sup>うなず</sup>いた。

すぐ横で地元<sup>かたあたり</sup>の中学生がキャッチボールをしていたくらいにはなにもないのが実情だ。

「ですが、長い間、人々に親しまれてきたことは伝わってきます。こうして残されていることがそのなよりの証<sup>あかし</sup>なのでしょう」

「ファルファリアルレンシアの言う通りだ」

ファルの言葉に弘武の背中に張りついたままのなるあが賛同する。

「建築中に遺跡のようなものが偶然発見されても、なかったことにしてそのまま埋め立てられてしまうことも多いらしいぞ？ まあ、そういったものは大概金にはならないからな」

「そんな世知辛い現実を免れてるだけマシってところか……。というわけで、次に行くか」  
 「そうねー。次は亀石か。ちょっと離れてるかな。ええっと……」  
 羽澄が地図を広げて道を確認しているその横で、鼎が帽子のつばを掴んだまま、キョロキョロと辺りを見まわしていることに弘武は気がついた。  
 奈良に着いてからこっち、やけに日射しを気にしているとは思っていたが、どうやら気にしているのは日射しではないようだ。  
 「塩見<sup>しほみ</sup>、なにかあったか？」  
 「ううん、この辺なら特に問題ないと思う。大丈夫」  
 「この辺なら？」  
 「ああいや、こっちの話。ごめんね、谷井くん」  
 「よくわからんが、なんか心配事があるなら聞くからな？」  
 「ボクの心配をしてくれるの？」  
 「なにせ班長ですし」  
 「アハハ、いつもは班長面倒くさいとか言ってるくせに」  
 「班長としての責務をすべてなげうっていいなら、面倒くさくないじゃないか」  
 「な、なるほど……そういう理屈なんだね。ちょっと感心しちゃった」  
 「この手の言い訳させたら弘武はすごいわよ？ わたし太鼓判押しちゃう」  
 弘武と鼎の会話に羽澄が割りこんでくる。

「うるせー。ところで場所の確認はどうなった？」

「弘武、曾根崎のタブレット持ってきてるんでしょ？ あれGPS機能とかついているんじゃないの？ この地図、大雑把すぎてイマイチ道がわかりにくいのよ」

「そういう持ってきてたな。使い方がよくわからんけど……」

弘武は智郎のタブレットを取り出すと、なるあに簡単な使い方を聞いて、そしてそれを羽澄に押しつけた。

「結局わたしのなの？」

「先頭を行くヤツが持っていた方がいいだろう？ だから塩見でもいい。だが、まだ微妙に危なっかしいファルと枕野を乗せてる俺は無理だ」

「自転車の乗り方ならもうマスターしましたよ？」

やけに自信ありげにニヤリと笑うファル。

自転車のところに見えている人型の光がそれを否定するかのよう(二に見える部分)に手（を左右に振ったような気が弘武にはしたのだが、今の弘武は鋼鉄のスルー。そのすべては気のせいだということ片づけられている。

「なんかGPSの表示、ずいぶんずれてるように見えるけど……しょうがないか。おっけー、だいたいわかったわ。行きましょう」

羽澄を先頭に、再び自転車を走らせていく弘武たち。

彼らがレンタル自転車を選んだ背景には、観光ガイドに「サイクリングロードも敷かれ

ているのでお薦め！」などと書かれていたことがあったのだが、舗装はされていてもどこもかしこも坂だらけ。いくらなるあが軽いとはいえ三十キロ前後はあるわけで、さすがの弘武も息切れ気味だった。

「あー、疲れた……」

亀石のところ(す)で自転車をとめると、弘武はその隣にあった自動販売機に縋りつき、コインを投入してスポーツドリンクを手に入れた。その半分ほどを一息で飲んでから、そこにあったベンチに腰を落ちつける。

亀石の周りは田んぼが広がっていて、見通しがかかりいい。点在する民家や自動販売機の周囲だけが視界を遮っている程度だった。

それほど疲れていない羽澄とファルが「亀石かわいい！」とか言っている声を聞きつつ、弘武はスポーツドリンクをもう一口喉に流しこんだ。

「ボクもこっちにいい？」

なぜかキョロキョロとしながら鼎がやってきて、弘武の隣に腰をおろす。

「そりゃ構わないけど、塩見にしちゃ珍しいな。疲れたのか？」

「そういうわけでもないんだけどさ。それ一口もらえる？」

「え？ それって、これ？」

弘武がペットボトルを差し向けると鼎はそのままそれを手に取った。

「うん、ボクもちょっとだけ喉渇いちゃったから」

一瞬の躊躇もなくペットボトルは鼎の口に運ばれていき、唇を押しあてられ、そしてその中身が鼎の喉に流しこまれる。

(うわ、こいつ綺麗な喉してるな……)

などと考えてしまう弘武。

「んっ……ぶは。はあ……ありがと」

そして、弘武の手にはペットボトルが返却される。中身はまだ残っているようだ。

「あ、ああ……まあ、俺はいいんだけど……」

「ん？ なに？」

「いや……ものすごい勢いで間接キスだな……って」

「へ？」

目をぱちくり、ぱちくり。

さすがに恥ずかしくなったのか、先ほど弘武が綺麗だという感想を抱いた喉元から顔へと、徐々にその白い肌が桜色に染まっていく。

「そ、そんな、単なる回し飲みだよ。気にしないで。——って、ごめん！ ボクが気にしなくても、谷井くんはイヤだったかも！」

「だから、俺はいいんだって！ こういうのは女の子の方が気にするかと思ってさ」

「う、うん……ボクは大丈夫。谷井くんなら全然構わないよ」

「そうか、じゃあ……」

いつまでも口をつけないのも失礼かと思ひ、ついさつき鼎が口をつけたばかりのペットボトルに口をつけ、ほんの一口だけ飲んだ。

スポーツドリンクのほんのわずかな塩っ気、鼎の唾液やら汗やらが脳裏をよぎっているのを、弘武はなんとか振り払う。こんなことで鼎の信頼を失いたくはない。

「それはそれとして、塩見」

「ん？」

「奈良に着いた辺りからずっとか。いやもしかしたら、一週間くらい前からなのかも」

「な、なにが？」

「まったく気のせいかもしれないけど、塩見の爽やかさに翳りが見える気がしてさ」

「かげり？ ってボクそんなに爽やかキャラなの？」

「別になんにも悩まないキャラだとか言うつもりはないけどさ、羽澄もちょっと気にしてたよ。最近、修学旅行の話になると鼎の反応が悪くなって。俺もそう思う」

「……そっか」

「さっきも言ったけど、心配事があるなら言えよ？ 俺が協力できることなら協力するし」

「それは班長としての責務っていうのを超えているんじゃない？」

「そうか？ 俺は班長として、この修学旅行を普通に終わらせたいんだ。いつも爽やかに笑ってるはずのヤツがそうじゃなかったら、それは普通じゃないだろ？」

「谷井くん……」

弘武は言い切ってから気恥ずかしくなり、残りのスポーツドリンクを一息にあおって立ちあがった。

「ま、俺に相談できることならってことで。女の子特有の悩みなら羽澄の担当だ」

「なにそれ、えっちな話？ あーあ、やっぱり谷井くんもえっちな男子の一人かあ」

「いやっ、そういうつもりで言ったわけではなく！」

「アハハ、いいよべつに。男の子がえっちなのはしょうがないよ」

「まったく否定されてない!？」

などと話しつつ、弘武と鼎が自転車まで戻ると他の三人はまだ亀石のところにいる。

「おい、そろそろ——」

「いいよー、いいよなるちゃん。そのまま、そのまま……はあ、はあ……」

「こ、これは母性本能がくすぐられますね……。わかります」

そこには亀石の上に乗って眠るなるあの姿と、その寝姿をあらゆる角度から激写する羽澄、そして羽澄と一緒にその寝姿を見てゴクリと生つばを呑みこむファルの姿があった。

「亀石に乗っかってるんじゃない!! 早く起きろ! いや、下りろ!」



橋寺で二面石を見、石舞台古墳を見回ってから酒船石を目指して自転車を走らせる。

羽澄はその先頭を切りながら、まだ東京にいた今朝方のことを思い返していた。

朝、弘武と会って早々に渡された瑛那からの御守り。そして、それと一緒に入っていた紙切れのことだ。

その紙切れにはこう書かれていた。

『修学旅行中にお兄ちゃんとの仲を進展させること。最低でもチューくらいはしちゃうように。応援してるから、がんばってね☆』

余計なお世話だ! と叫びたいくらいの羽澄だったが、はっきり言って状況は芳しくない。卒アル委員の仕事にかこつけて、ちょこちょこと弘武の写真もこっそり撮ってしまった。もう親しげにしているのである。

もちろん羽澄としても、幼なじみというポジションのままつかず離れずでここまでできてしまったこの状況を、修学旅行という高校時代の一大イベントにおいて打破しようという目論見はあった。

だが、よりによって弘武が「金髪巨乳が好み」という旨の発言をした翌日に金髪巨乳美少女であるファルが転入してきて、しかも同じ行動班になるというトンデモサプライズが起こり、頭の中が真っ白になってしまったのだ。

もう一人の男子である智郎が脱落したのも痛かった。

元々この五班は、クラス内では浮いてしまっている枕野なるあも含めて、比較的全員仲

がいい。智郎の脱落によって男子一人になった弘武を、放置してしまうような女子たちではなかったのだ。

そこは率先して羽澄自身が弘武の側にいればいいという考えも頭をよぎるのだが、羽澄は卒アル委員として、クラス全員の写真を撮りまくと宣言してしまっており、ずっと弘武の側にいるというわけにはいかない。

その上、羽澄も伊達<sup>だて</sup>に弘武の幼なじみではない。修学旅行だからといって、そんなあからさまな距離の詰め方は格好悪いのではないかと思ってしまう。ええかつこしいはお互い様だった。

そして、極めつけは亀石での出来事。

こんなことではいけないと、羽澄は親友の鼎<sup>かね</sup>に相談を持ちかけようとしたところ、その鼎が弘武と二人で並んでベンチに腰をかけて、和やかに話しあっているではないか。それだけならいい。問題はその時の鼎の表情だ。

同じ方向を見て座っていたから、弘武は気がついていなかったかもしれない。だが、その時の鼎は、親友の羽澄ですら見たことがないほどの恥じらう乙女全開の表情だったのだ。だけど——羽澄は首を振って考え直す。

（これはわたしの危機感が見せた幻だったのかもしれない。二人で話していたのは事実、だけど、鼎の表情なんていうのはわたしの見間違い、思い違いかも……）

「羽澄、羽澄。行きすぎ」

「ふえっ!？」

鼎に呼びとめられてブレーキをかけ、Uターンして少し戻ると、少しひらけた場所になっでいて、酒船石と亀形石造物への案内の看板が出ていた。どうやらその二箇所にはここから行くことになるらしい。

自転車降りて駐め、ファルと弘武たちが追いついてくるのを鼎と二人で待つ。鼎は落ちつかないに何度も帽子を被<sup>かぶ</sup>り直している。

（そういえば、鼎は帽子を被ったことで弘武にかわいいと言われてた。もしかして、それで気にして……?）

鼎との仲は一年で同じクラスになってからだだったが、その間一番の親友であった自負が羽澄にはあった。

羽澄はその親友として思い返してみたのだが、鼎がこんな風にファッションを気にしたことなどは、さっぱり記憶になかった。

（やっぱり、さっきのキュンキュン乙女スマイルも見間違いなんかじゃなく——）

「お待ちせしました。ちょっと信号に引っかかってしまって」

「ふひー、わりと距離あったな。おい枕野、起きろ&降りろ」

「……すぐ眠い」

「すでにアホほど寝てるだろうが。そのうち脳みそ溶けて耳からこぼれてくるぞ? っていうか、降りろ。俺が降りられん」



「ほら、なるあちゃん。ボクが降ろしてあげるから」

鼎からだがなるあの身体からだを持ちあげて、弘武の自転車の荷台から降ろしている。

「塩見しほみ、あんまり枕野を甘やかすなよ」

「アハハ、でも眠いんじゃないかな。ね、なるあちゃん」

甘やかすなと言いつつ一番甘やかしてるパパと、笑って甘やかしているように見せて自分で立たせてるしっかり者のママ。そして、そんなパパとママの両方にもたれかかる甘えん坊な子供……。羽澄はなぞらはそんな光景にペチンと額たまごを叩いた。

「羽澄さん、どうしました？」

「あ、ううん、ちょっと虫がね。さあ、酒船石はこの右手の階段をあがっていったところみたいよ。早く行きましょう」

「そうですね。わたしも早く酒船石というのを見てみたいです。ここまでの石造物たちも本当に素晴らしいものでした。酒船石にも期待してしまいますね！」

「そうねー。酒船石って、なにか意味ありげな溝が掘られてるんだけど、結局なんのためものか未だいまにわかってないらしいわよ？」

あまりにも自然な自らの取り繕いっぷりに軽い眩暈めまいを覚えつつ、山道の階段を登っていく。道の両側には竹などが生い茂り、鬱蒼うっそうとした雰囲気を醸しだしていた。

「普通に山道ねー」

「いい雰囲気ですねー」

などと話しながらしばらく登っていくとようやくその場所が現れた。辺りはやはり木々に遮られており、陽の光は届いていない。そんな薄暗い山道の中にぽっかりと空いたそこに、その石の塊はあった。丸と楕円だえんとそれを繋ぐ直線。

確かにそれらの溝は、単なるデザインと言うよりは、なにかの意図があつて掘られているようにも思える。

「どうしてこれがここに……」

「え？ ファルちゃん、なにか言った？」

「あ、いえ……少し似ているものを思い出したので」

「ふうん」

これまで見てきた石造物群と比べて、なにが違うというのは特にはない。これも謎なぞの石造物の一つ……。

そのはずなのだが、羽澄は酒船石のどこが琴線に触れたのか自分でもわからないままに、バシバシと写真を撮りまくった。

「谷井、上から見たい。肩車をしてくれ」

「……しようがないな」

「肩車はするんだ」

しゃがみこむ弘武に思わずツッコんでしまう羽澄。

「これを上から見たいって気持ちはよくわかるからな。枕野、デジカメで撮って、後で俺にもデータくれ」

「フン……仕方ないな」

（なるちゃんもこういう時、口では生意気なことを言ったり、舌打ちしたりしてるんだけど、弘武に見えない様に嬉うれしそうに顔してるのよね……。それも多分、気のせいじゃない……と思うんだけど）

そこまで思っ羽澄はブンブンと首を振った。

（いけないいけない。ちよっと気分を変えなくちゃ。わたしがみんなの修学旅行を台無しにしちゃうわけにはいかないもの。うん）

「どうしたの、羽澄。真剣な顔で頷うなずいたりして」

「いやあ、酒船石かっこいいなって思っ。アハハハハ。あ、わたし、ちよっと自転車自転車が心配だから、先に降りてるね」

「えっ、羽澄？」

「みんなはゆっくりしていいよー」

ともかく、気持ち落ちつかせるためのインターバルがほしい羽澄だった。



ゆっくりしていいと言われたものの、弘武たちは羽澄が行ってしまった直後に山道を降りをはじめていた。ちなみになるかに肩車のままでいいと言われたが、問答無用でその場で降ろしている。

(それにしてもさっきの酒船石……微かに光っていたな。あまりにも微かだったから、一瞬ヒカリゴケかと思っただけだ)  
と弘武は思い返す。

(光って見えるものと、光って見えないもの。境内で見たもののように空間を漂っているようなものもある。もっとも、ファルの肩辺りに浮いているオブションや自転車に憑いているようなものまで、同じ類とみていいのかよくわからないが……)

駐輪した所まで戻ってくると、羽澄はすでに自分の自転車にまたがっていた。

「おっそーい！」

「おまえがゆっくりしろって言ったんだろーが」

弘武の反論を聞く気がないので、羽澄はそのままペダルを踏みこんだ。

「クラスの子たち見かけたから、わたし写真撮ってくるね。先に亀形石造物回ってー！」

「おいっ！ 単独行動すんな！ 羽澄！」

「谷井くん、羽澄はボクが追いかけておくれよ」

「ちょ、塩見まで!?!」

呼びとめる間もなく、鼎も颯爽と自転車に飛び乗り羽澄を追って走り去ってしまった。

「お、怖れていた事態が……」

「うむ、寝る」

「寝るなっつては」

言ってるそばから枕を持って山道の階段にうずくまり、眠りはじめてしまうなるあ。

ここまでは比較的上手くいっていったものの、やはりこうなったかと弘武は嘆く。

「って、あれ？」

ドキリとして辺りを見渡す弘武。

——羽澄と鼎は他班を追いかけていった。

なるあはここで寝ている。

ファルはどこだ？

エルフ耳やら、異文化発言やら、はたまたオブションやら自転車の背後霊やらで、トンデモ存在認定はしていたが、その行動自体はまともだったはずのファルの姿が見えない。

「そうだ、ここに降りてくる途中から見えないんだ」

そのことに気がついた弘武は、階段に足をかけてとまり、

「枕野、ここにもいいから寝るな。起きて、少しだけ待っててくれ。わかったな？」

「ん……わかった」

なるあはそう言って再び突っ伏し、片手だけあげて、弘武を追い払うようにシッシツと振り払った。



「!? そっ、それは申し訳ありませんでしたっ！ 本当にすみません！ 早く、みなさんのところに帰りましょう！」

「あ、ああ……」

光とファルの関係がわからない。

弘武は今まで自分以外に、自分と同じ光が見えるという人に会ったことがなかった。

（いや、やはりファルにも見えていないのかもしれない。とするなら、さっきのことはファルとしては、本当に深呼吸をしていただけなのかも。それにピツタリと合わせて光が明滅して見えただけで……。だけど、そんな偶然が本当にあるのか？）

「もー、なるちゃん一人をこんなところに寝かせて、二人でどこに行ってたのよ。ちゃんと班行動しなさいよね！」

ファルと二人でなるあのところまで戻ると、すでに羽澄と鼎かなえは戻ってきていて、開口一番そんなことを言われてしまった。

「羽澄、おまえには本日の『おまえが言う大賞』を進呈しよう」

「ハッ、誠にもって申し訳ありませんでした。他の班も明日香村を回っていたという事実はがに、ついテンションがあがってしまっ……」

意外にも素直に頭をさげてきた羽澄に、思わず噴き出しそうになる。

「そう、だな……」

「ん？ そうって？」

「いや、だからさ、みんなテンションがあがるのはわかるけど、単独行動はマジで勘弁してくれて話」

「わたしも、本当に申し訳ありませんでした」

「ボクもごめん」

「もういいって。次行こうぜ。ほら、枕野も起きろ」

「んむう……」

なるあを立ちあがらせながら、弘武は改めて思う。

——大丈夫、これも今までとまだなにも変わらない。今まで通り、光を見たことを自分がスルーしてしまえば、ほら、いつもの通りの日常じゃないか。

未だにファルの自転車のバランスが崩れないように支えているように見える人型の光がちょっと気にはなるが、これも見なかった。俺はなにも見てはいないのだ。



その頃——

奈良市上空では、奇妙な生物が翼をはためかせ、甲高い啼なき声をあげていた。

それは鼻をならして首を上下に振り、自らが嗅かぎつけたその匂においに満足して今一度啼なき声をあげる。

差し渡し二メートルを優に超える翼を大きく広げ、主の待つ森の茂み目指して滑空していく。

だが、その姿を見咎める者は誰もいなかった。

それは半ば影の領域に身を潜めるモノであり、普通の人間がそれを視界内に入れたとしても、陽炎が揺らめいた程度にも認識できはしないだろう。

厳密に捉えるならば、生物と言えないのかもしれない。それは確かに生きてはいたが、この世界の生物学では分類できない存在であることは間違いなかった。

それは神話や伝説、おとぎ話、あるいはフィクションと呼ばれるものの中でのみ存在し得るもの。

すなわち、本来ならばこの世界にはいないはずの存在だった。

それは木々の生い茂る森の中にほどよく開けた場所を見つけ、四本の脚でそこに颯爽と降りたつた。

「戻ったか、ペリンよ」

木陰から現れたその姿を自らの主と認め、首を上下に振ってからトタトタと近寄り、その顔をすり寄せる。

「よしよし、首尾よくいったようだな」

『ペリン』と呼ばれたその主は、褐色の肌に流れるような艶やかな黒髪を持つ女性の姿をしていた。

胸元が大きく開いたブラウスに凝ったデザインのプローチが彩りを添えており、彼女自身が持つ妖艶な雰囲気と鋭い瞳が相まって、トップモデル顔負けの美しさを醸しだしている。

その耳が笹の葉のように長く尖っていることも人間の女性としての美しさを含めてしまつてよいのなら、美女と言いつつ切つてしまつていいだろう。

「やはり『因果の糸』はこの世界に繋がっていたか。そして、それはこの付近にある」  
彼女は薄い笑いを浮かべ、ペリンの身体を撫でさすつた。

「おまえは引き続き『因果の糸』を探しだせ。おまえの鼻だけが頼りなのだから」  
ペリンは首を上下に振り、そしてまた主を仰ぎ見る。

「どうした？ 早く探しに行け」

主の言葉にペリンはもう一度首を上下に振り、その腰元を鼻で指し示した。  
「……先ほどやったこれか？ 気に入ったのか？」

ファンファンと鼻を鳴らすペリン。

「探してきたらたっぷりくれてやる。さあ、行け」

後ろ脚だけで立ちあがつて羽根を広げ、主にやる気を見せた。

「おっと、その姿のままではさすがに拙いな」

彼女が何事か呟くと、ペリンの姿はこの辺りでは珍しくない動物の姿に変わつていった。もっとも、大きく変わったのはその羽根が消え失せたことくらいで、羽根を閉じている

ときのシルエットとそう大差はない。

「いいぞ、行け」

今度こそペリンは主の命令に従って森の中を駆けていった。

『因果の糸』が繋がる場所へ。

その匂いの元となるところへ。

主に喜んでもらうために。

あのなんだか病みつきになるエサをたっぷりともらうために。

#### 第四章

### 鹿 ～奈良公園にて～

「すいませ〜ん！ 鹿せんべい一個ください！」

「はい、ありがとう。百五十円ね」

元気のいい羽澄の台詞に、路上販売員の中年女性も笑顔で応じる。

酒船石での一件の後、弘武たちは無事に亀形石造物から飛鳥寺を回って、予定していた明日香村のルートをすべて回り終えていた。

自転車で効率よく回れたのがよかったのか、近鉄奈良には夕方の五時半前には戻ってることができた——まではよかったのだが、近鉄奈良の改札を潜った時のことである。

「六時半までに戻ればいいんだよね？ ちょっとだけ奈良公園に寄っていかない？」

「ホテルまでの距離を考えたら三十分もないだろ。もっと余裕を持った行動をだな……」

「でも、奈良公園にはクラスの子たちもまだ結構いると思うのよね」

「奈良公園は明日見回る予定じゃないか」

「明日は明日、今日は今日！ 今日しか起こらないことが、必ずある！ 今わたし、いいこと言った！」

勢いだけで言ったであろう羽澄の言に感銘を受けたかのように、ファルまでもがポンと

胸前で両手を合わせて賛同する。

「いいと思います！ わたしも奈良公園というところを見てみたいです！」

「ほら見なさい。ファルちゃん超いい子」

「くっ……」

そんな経緯があつて弘武たち五班は奈良公園に足を踏み入れていた。

今は、せっかくだからと羽澄が鹿せんべいを買ってみたところだ。

ちなみに鹿せんべいは奈良公園内の路上のそこかしこで売っていて、それを買う客を目当てにしてか、鹿もその周りにうようよしている。

「結構、人いるよね。それに、ボクたちみたいな修学旅行生も多いみたいだ」

鼎が帽子のつばをつかみながら、キョロキョロと辺りを見渡していた。

「かなえー」

「お」

そんな鼎に羽澄がデジカメを向けると、鼎はすぐにそれに気がついて、得意げな笑顔でVサインを決める。

「目立ちたくないってわけじゃないんだな」

「だって、ヘンな風に写っちゃうのはイヤじゃないか」

そういうものなのだろうかと弘武は少し首を傾げた。

「でも、鼎の油断した表情も撮りたい」

「それはおあいにく様」

口を尖らせる羽澄に、鼎はフンと笑ってみせる。

「それにしても羽澄。どこを見てまわるつもりなの？ 奈良公園って一口に言っても、かなり広いよ？」

「あれ？ もしかして、鼎もホテルに戻りたかった派？」

「まあ、奈良公園は明日も来る予定だし、とは思ったかな。それに、なるあちゃんももうフラフラだし」

なんとか自分の脚でついてきているものの、確かななるあの頭は先ほどからうつらうつらと揺らめいていた。

「なんだったら、みんなは先にホテルに戻ってでもいいわよ？」

「班行動は絶対厳守だと矢場先生にも委員長様にもきつく言われている。これを破ると班長会議で俺が吊される」

きつく言ったり吊したりするのは主に委員長様だけが。と弘武は内心つけ加える。

「三十分くらいならいいんじゃないかな。南大門前を中心にして、みんな目の届く範囲で行動するとか。それならなるあちゃんもベンチなんかで眠っていられるだろう？」

「そうしてもらえると助かる。疲れた」

鼎の提案に大きくうなずくなるあ。

「いや待て、枕野はほとんど寝てただろ。なんでそんなに疲れてるんだよ」

「自転車の運転が荒かったからな」  
「いいご身分だな、おまえ」

弘武が人差し指でぐりぐりと額を押しこむと、なるあはいつもの様に押されるがままに頭をそらした。

「南大門前なら他の班とも遭遇できそうな気がするし、わたしもそれでOK」

「羽澄がよければ、そうすることにしよう。ともかく、あまり離れないようにな」

「らじゃー」

ほどなくして南大門前の広場にたどり着く。

南大門と言っても、寺などの南側の正門ならばなんでも南大門なわけだが、こと奈良公園で単に南大門と言えば、東大寺の南大門のことを指す。東大寺には有名な奈良の大仏もあり、奈良公園の中心となる観光スポットとなっていた。

そんな場所故にももちろん観光客も多く、先ほど鼎が言っていたとおり修学旅行生と思われる制服姿もそこかしこにある。

とはいえ、どうやら中学生がほとんどの様子。やはり高校の修学旅行で奈良というのはすでに廃れているのかもしれない。

弘武はそんなことを考えつつ、同時に「スカートなげー」「膝隠れてる」「やはり東京の高校はスカートの丈が短いのか」などとも思っていた。

弘武の視線の先で鹿三頭に詰め寄られてきゃーきゃー言っている子たちも、やはり膝下

まで丈のあるスカートだ。一方、班員たちのスカートはやはり膝上丈で、それぞれ膝小僧がかわいらしく見えている。

（スカートの裾とソックスの間でちらりと見える膝小僧……。うむ、これはいいものだ）

「弘武さん、どうかしましたか？」

「い、いや、やっぱり鹿がたくさんいるなと思って」

弘武がそう誤魔化すと、ファルは大きくうなずいてばんと手を打った。

「本当です。街中に鹿がこんなにたくさんいるだなんて、わたし、びっくりしてしまいました。もっと警戒心が強くて、人里には下りてこない生き物だと思っていたんですが……」

「この奈良公園の中には春日大社っていう古い神社があるんだけど、鹿はその神使——神の使いな？——として保護されてきたらしい。あんまり長い間そうされてきたから、奈良公園近辺の鹿はまったく人間を怖れなくなっちゃった。とかなんとか」

「なるほど、このあたりでは鹿は聖獣という扱いなのですね」

修学旅行前に調べた内容をかいつまんで説明すると、ファルは感心した様子で何度も首を縦に振った。それが鹿せんべいをねだる時の鹿の動作とオーバーラップして見えて、弘武は思わず顔を綻ばせてしまう。

「駒斑の制服を発見！うちのクラスじゃないけどいいや！ちょっと撮ってくるねー」

「あいよ、がんばって」

コンデジ片手に走っていく羽澄を見送り、弘武は他の班員にやれやれと苦笑を返した。

「あれ、塩見は？」

「鼎さんなら……あら？　ここにいたと思っただけですけど……」

「ふむ、まあ目の届く範囲で云々は塩見の提案だし、その辺にいるかな。もしかしたら、トイレかもしれないし」

「そうですね」

そうは言ったもののやはり気にはなるもので、弘武はその場でぐるりと周囲を見渡した。

「……？」

見渡した光景の中に不可解なものがあつた気がして、弘武は首を傾げる。

(なんだったんだ、今のは。よくわからない。もう一度見渡してみよう)

弘武は目をギョッと閉じ、呼吸を落ちつけてから、もう一度それを見た。

**なんかいる。**

なんかいると言っても、ファルの自転車に憑いていた光の人型とは明らかに違っていた。なにしろファルのそれは、人型をしていたにしろ弘武にしか見えない。光という現象に過ぎなかった。

だが、今度のものは違う。

それは弘武の目には、はっきりとした物質的なものとして認識されていた。

「あら、一頭だけ大きな鹿がいますね」

ファルは呑気にそう言う。

ファルだけではない。周囲の観光客たちからも「あの鹿おつきー」という感嘆の声が聞こえてはいる。

だが、弘武の認識はその大きさのみに留まっただけではなかった。

「確かに周りの鹿より一回り大きいとは思うんだが……」

弘武の理性が、「これもスルーすべきだ」という声をあげていた。だが——  
ふと、ファルに目が留まる。

「どうしました？」

ファルはきよんととして首を傾げた。

——かわいい。いや、かわいいのは今は置いておけ。かわいいのは事実だが、そこじゃない。もうすっかり見慣れてしまっていたが、これはファルの耳と同じ現象なんじゃないのか？

光としてじゃなく、物質的にはつきり見えているのに、俺以外の人はなんの反応もしていない現象。

その現象の主、聞いてみる手はあるんじゃないのか？

だが、ファルの様子は周囲の観光客たちのそれと同じようにも見える。

そこまで考える内に、弘武の息があがっていた。唇が乾き、心臓が早鐘を打ち鳴らす。「ずいぶん立派な角ですけど、危険ではないのでしょうか？」

「確かにあの角はわりと凶器だな……。確か、『鹿の角きり』とかいう行事があって、本来ならあの手の角は切られてしまうハズなんだけど……」

薄く感じる酸素の中でなんとかファルの問いに答える弘武。

「まあ、そうなんですか。それで他の鹿は角がなかったりするんですね」

「それは、それとしてだ——」

「はい」

「俺の……俺の気のせいかもしれないんだけどさ」

弘武は覚悟を決めてそれを口にした。

「あの鹿、角や身体からだが大きいだけじゃなくて、その……羽根はねが、生なえて、ようには見えな  
いか？」

「羽根……ですか？」

こくりと慎重にうなづく。

——一笑に付されて終わりというなら、それでもいい。いやむしろ、それがいい。

今日一日一緒にいただけでも、ファルがそれほどおかしな反応を返してくる子だとは思えなかった。俺がしつこく、見えたものを主張しまくるようなことさえしなければ、見間違まちがいということことで済すませてもらえるだろう。

「鹿に……羽根……」

そう、ここでプツと噴はなき出してくれ。

首を傾げて、そうは見えないと否定してくれるパターンでもいい。

だが、ファルの口にした台詞せりふは、弘武が予想したそのどれでもなかった。

「羽根の生えた鹿しかという……ペリュトンみたいな感じでしょうか？」

「はい？ ペリュとん？ ってなんだ？」

ファルの国の料理かなにかだろうかと首を傾げる弘武。

「本日のメインディッシュはカジキマグロのペリュトンでございます」とかそんな感じで、  
どういふものかさっぱりわからないが、なんだか美味あじいそうな気がする。だがしかし、文脈ぶんまからして料理はない。焦こるな、俺。

「あ、でも、ペリュトンは、羽根の生えた鹿しかではなく、鹿の頭と四肢を持った鳥とりなんですよ。だとすると、ちょっと違いますよね」

「い、いや、ちょっと待て」

ファルにそう言われて、弘武は改めてその異形の鹿を見た。

観光客の鹿せんべいに必死に首を上下させるその姿は、まさしく鹿のそれだったが、よく見れば確かに胴体は鳥のものに見える。

「……胴体は鳥ってことだよな？ 尻しつっぽも」

「ペリュトンならばそうなりますね。もしかして弘武さんは、あの大きな鹿が——あら？」

「へ？ あれ？ どこ行った？」

いつの間にか、その化け鹿はいなくなっていた。

よかった、やっぱり見間違ひかなにかだったんだ。すべては俺の気のせい！ 世はなべて事もなし！

弘武がそう思いこもうとした、その時――

「きゃあああっ!?」

甲高い少女の悲鳴が辺りに響き渡った。

「羽澄の悲鳴!」

瞬時にそう判断すると、弘武は一瞬の間も置かず悲鳴のした方向へと駆けだしていた。

何メートルも離れていない場所にさっきの化け鹿がいるのが目に入る。それは後ろ脚だけで立ちあがり、いままさに羽澄に襲いかかろうとしていた。

「羽澄!!」

弘武はがむしゃらになって羽澄と鹿の間に駆けこみ、羽澄を背にして両腕を拡げる。

だが、ただでさえ周囲の鹿とは一線を画す大きさだった化け鹿が、後ろ脚だけで立ちあがっているのだ。その上背は、弘武を遥かに超えている。

さらには、弘武が両腕を広げたのを威嚇とでもとったのだろうか。化け鹿も負けじとその翼を左右に大きく広げ、その巨大さを誇示してきた。

――化け物だ。

自分が今相対しているものが、なんであるかという実感に、凍りつくような震えが足元から湧きあがってくる。

（だけど、俺が羽澄を守らなくちゃいけない!）

弘武は自らの震えをかみ殺した。

化け鹿が甲高い啼き声をあげて、その前脚を振りおろしてくるのが見える。

（絶対に羽澄は傷つけさせない!）

咄嗟に羽澄を振り返って、弘武はその身体に覆い被さった。

その瞬間、誰かがなにかを叫んだ気がしたが、弘武にはよく聞き取れなかった。

ドサリと音を立てて、芝生の地面に羽澄もろとも倒れこむ。

そして、背中に見舞われるだろう激痛に備えて、筋肉を張り詰めさせる。

だが――

「……………?」

直後に来ると思われた前脚の一撃はいつになってもやって来はしなかった。

代わりにあるのは手のひらいっぱい広がる素晴らしく柔らかな感触。

いや、柔らかいの一言で片づけてはこの感触に対して失礼だ。

柔らかく、張りと弾力があり、その上弘武の手にピタリと吸いついてくるような、極上

のもちもち感。そして、懐かしい春のような暖かさが、化け物への恐れで冷え切っていた弘武の心を溶かしていく。

この、もっと触っていたい、もっと揉んでいたいと思わせる、この素晴らしい感触の正体はいったい――

「ひ、弘武……」  
「お、おう、羽澄……。……羽澄？」  
モミ、モミモミ。

この感触の正体は……いったい……。  
おっぱい？ おっぱい……。

そうか、俺は今、羽澄のおっぱいを、揉んで――

春の暖かさによって溶かされたはずの弘武の心に、再び氷点下の風が吹きこんだ。

「ま、待て！ 落ちつけ羽澄！ これは、あれだ！ ほら！ あれ！」

「いったいいつまで揉んでるつもりよ!! いいから離せ！ 離せ！ 離してよ!!」

「はぶっ!? はぶるしゅっ!! はぶぼっ!!」

激痛は、弘武が覚悟していなかったほったに、左、右、左と強烈にやってきた。

左右の頬が熱い。

理由はもちろん初夏の日射しによる日焼けではなく、羽澄の往復ビンタによるものだ。

「え、えっと……ごめん」

「いや……いいい」



ホテルに戻る帰り道、羽澄は気まずそうに何度も弘武に頭をさげる。結局、化け鹿はあの前脚を振りおろすことなく去っていったのだという。

「でも、弘武はわたしを助けようとしてくれたのに……わたし……」

「うーん、しょうがないんじゃないかなあ……。ボクが駆けつけたときに見たのも、谷井くんが羽澄を押し倒しておっぱい揉んじやってた感じだったし……。危うく、本当に羽澄のことを襲ったのかと思っちゃうところだったよ」

やった行動だけを思い返せば、羽澄を押し倒しておっぱいを揉んでしまったことは事実。しかも、そのあまりの感触に、わりと入念に揉みしだいてしまっていた。

不可抗力といえなくもない範囲ではあったものの、そんな罪悪感も相まって弘武自身は羽澄の行動を非難する気など毛頭ない。

だが、羽澄の往復ビンタによって頬がかなり腫れてしまっており、表情も言葉もぶっきらぼうと思われるも仕方のないものになってしまっているのである。

「だからごめんってばあ。弘武がね、助けてくれたことはわたし、本当にすごく嬉しかったし、すごく感謝もしてるの。あの鹿、やけにおっきくて怖かったし……。だから、ホントにごめんっ！」

「だから、怒ってないし……。もう、大丈夫だから」

「ほんつとうに、ごめん！」

ここで「頬が腫れてるから上手くしゃべれない」と言ってしまうのも、なんだか当てつ

けがましく思われる気がするわけだ。

「弘武さん、少しいいですか？」

ファルに呼びとめられ弘武は立ち止まった。

「こちらに顔を向けてください」

その言葉に従って顔を向ける。

ファルは塗り薬をとりだし、それを指ですくって、弘武の頬に優しく塗りつけた。

「すまん」

「わたしは五班の保健係ですから」

にっこりと微笑むファル。弘武の頬に薬を塗りつけながら、小さく何事かを呟く。

「——ッ」

「あ、ごめんなさい。痛かったですか？」

「い、いや……」

ファルが何事かを呟いた瞬間、弘武の目の前にあったファルの指先が、淡いグリーンの光に包まれていたのだ。

落ちついてそれを受け入れると、ファルの指先が痛みや腫れを吸いとりでもしているかのように、スツとそれらが引いていくのが感じられた。

「どうでしょう？ まだ痛みますか？」

「いや……驚いた。すごく楽になったよ。ありがとう、ファル」

「よかった……フフツ」

その安堵に浮かぶ笑顔には一点の曇りも感じられない。

緑の光に一抹の疑問を感じつつも、弘武はファル自体はやはり信じてもいい存在だと再認識していた。

「うう、ごめん、弘武……。ほっぺた、そんなに痛かったのね……。マジでごめん……」  
 「だからもういいって、羽澄。ファルのおかげで痛みもなくなっただし、もうなんともなし！ 羽澄も俺も、無事でよかったですってことで。な？」

「うん……」

それでようやく納得したのか、羽澄は振り切ったように頷き、先にいってしまっていた鼎の方へと走っていった。

「それで、あの鹿って結局どうなったんだ？」

「鹿が立ちあがったとき、なるあさんの助言で羽澄さんが持っていた鹿せんべいを投げたんですよ。それがだいたい弘武さんが羽澄さんに覆い被さったのと同時に……」

少し気まずそうにその時の様子をファルは説明する。

「鹿の方は、羽澄さんが投げた鹿せんべいを追いかけていってしまいました……。鹿せんべいを啜ると、そのままどこかに去ってしまいました」

「俺が羽澄をかばう必要はなかったってことか……」

ただ乳を揉んだだけか……。と自らの手のひらを見つめる弘武。

「そんなことはないと思いますよ。羽澄さんも嬉しかったとおっしゃっていたじゃありませんか。弘武さんはとても勇気のある行動をしたと思います」

「だがそれは向こう見ずの勇氣——すなわち、蛮勇というものだ。谷井にとっては椿沢さえ無事ならばよかったのだろうが、私たちにとってはおまえも無事でなくては困る」

なるあの冷たいトーンの声が、弘武の心をじんわりと温かくさせる。

「枕野……。そうだな、ありがとう。羽澄に助言してくれた件も、本当に助かった」  
 「気にするな。私はどうやら副班長らしいからな。班長を補佐するのは当たり前だ」

弘武は苦笑しつつ、なるあの頭に軽く手を載せ、なるあはそれを嫌がりもせず口元だけであつすらと笑う。

「ところで枕野ってあの時、俺とファルが話してた辺りで寝てたんじゃなかったっけ？」  
 「いや、おまえたちが話している間に、よさげな木陰を見つけたのでそこに移動していたんだ。寝ようとしたらすぐ側で椿沢の悲鳴があがってな、まあ、それだけだ」

「移動する前に声かけような？ 副班長殿」

わしわしと指先に力をこめる弘武。

「あうう、頭をぐりぐりするな。助かったんだからいいじゃないか。あううっ」  
 「フフフ、お二人は本当に仲がいいんですね」

弘武たちはそんなやり取りをしながらか、宿泊先のホテルに入っていた。フロントでそれぞれの部屋の鍵を渡され、ばらばらと歩いていく。

「なるあさん、よろしくお願ひしますね」

「ああ」

智郎ともろうの代わりがそのままファルであれば弘武と相部屋になっていたところだが、如何いかに面倒めんどうさがりな担任・矢場翔子やばしよこといえども男女を一部屋にするほどには無神経ではない。なるあと共に階段を登っていくファルを見送って、弘武はホッと胸を撫でおろしていた。「なんか、ずいぶんファルちゃんとイチャイチャしてたじゃない」

そこに羽澄はづみが声をかけてくる。先に部屋に行かせたのか去っていく鼎の背中がその向こうに見えていた。

「イチャイチャなんてしてねーよ。ってか枕野も一緒だっただろうが」

「くっ……なるちゃんとのイチャイチャも羨うらやましい……っ」

「いや、別に枕野ともイチャイチャした覚えはないんだが……」

ファルにもなるあとの仲がいいと言われたばかりの弘武ではあるが。

「じゃあ、ファルちゃんのことにはなにも意識はしてないわけ？」

羽澄はづみが言っていることが異性間における意識のことだとは弘武にもわかってはいる。

だが、今の弘武にはその方面で物事を考える余裕はなくなっていた。

次々とおかしな現象を起こしているファル。

ファルの肩で浮かんでいるテニスボール大の光のこと、自転車に憑ついていた光の人型のこと、酒船石でのこと、今し方腫れた頬を治したのもそうだ。あれらはすべて偶然でファ

ルの意志とは無関係——そう考えるのはさすがに無理がある。

「羽澄自身は、ファルのことどう思ってるんだよ？ どう、見えるというか……」

「なあんだ。やっぱり気になってるんじゃない」

「だから、そういうんじゃない——」

「どう思うかっていったら、そりゃあかわいいわよ。わたしが今まで会ったことのある女の子の中じゃダントツね。優しいし、話しやすいし、それにほら、おっぱいだってすっこおっきいじゃない。男の子だったら放っておかないわよね」

「だから、そういうのとは違うんだって」

羽澄の言葉にどうしても拗すねたニュアンスを感じてしまい、弘武はそれをなんとか取り繕つくろおうとした。

「なにが違うのよ」

「だいたいおっぱいの話なら羽澄だって充分大きいじゃないか。さっきだって俺、まさか羽澄はづみがこんなにいい乳に成長してるだなんて思わなくて——」

「……弘武？」

「——ハッ」

「この、エロボケがああああああああっ!!」

ファルによって回復したはずの弘武の頬は、再び真っ赤に腫れあがることになった。

夕食の場所となるホールに弘武が入ると一瞬さわめきが立ち、弘武は自分に注目が集まったことに気がついた。

他にも空いている席があるところをみると、夕食の時間に遅れたからではないらしい。

「谷井くん、遅かったね。ごはんをよそってあげるよ」

「おお、ありがとう塩見」

鼎にお礼を言いつつ席に着き羽澄の様子をうかがうと、不機嫌な様子で顔を横に背けていた。やはりまだ怒っている様だ。

「弘武さん、もしかしてまた腫れてきてしまったんですか？」

「心配してくれてありがとう。だけど、これは自業自得ってヤツなんで、ほっといてくれて大丈夫だよ」

「そうですか？」

それでも心配そうに見てくるファルに、弘武は苦笑してうなづく。

そんな二人に羽澄はちろりと目を向けたが、弘武と目が合うと再び顔を背けてしまった。「はい、谷井くん。大盛りにしたけど、これくらいは食べちゃえるよね？」

「サンキュー、塩見。むしろおかわりするかも」

弘武のその台詞セリフにファルがうっとりとした表情で反応する。

「いいですね、ごはんをおかわり……。はあ、ごはん……」

「ファルは本当にごはんが好きだな……」

「はい、大好きです！ わたしがこの五班に所属することになったのも、ごはんのお導きかと！」

「ダジャレかよ」

「フフ、フフフフフフ」

最初から人見知りしない様子だったが、それでもやはり朝よりもずいぶん硬さが取れた感のあるファルだ。

「ファルさん、おひつごとおかわりしていいみたいだから、いっぱい食べてね」

「はいっ」

クラスの全員が揃い、いよいよ食事がはじまるとみんな口々に話しはじめ、ホールはあつという間に賑やかになっていった。

それらの声を聞いて、弘武はホールに入ったときの注目の原因に合点がいく。

「椿沢が」「谷井が」「大きな鹿が」「押し倒した」「襲われた」「揉んだ」「揉まれてた」「あれは絶対入ってたよね」「往復ビンタ」「我々の業界ではご褒美です」  
e t c

改めて誰かに聞かなくても、勝手に耳に入ってくる単語だけで、どういう噂うわさになっているのかはすぐに想像できる。

とはいえ、「大きな鹿」が出現した話と一緒に語られており、冗談や悪ノリはともかくとしても、ちゃんと大きな鹿によるアクシデントの結果として認識されているようだと言堵の息を漏らした。

（だけど、やっぱり「大きな鹿」か……）

あの鹿に羽根が生えていたというのは、やはり弘武一人だけの認識らしい。

あれほどあからさまに大きく翼を広げていたというのに、そのことについては誰の口からも出てきてはいない。

「そういうえば谷井。さっきの鹿だがな、未だに見つかっていないらしいぞ？」

なるあからの話題振りに、弘武は箸はしの動きを止めた。

「この季節は鹿にとっては出産期で気性が荒くなる傾向にある。それは人間を怖おそれない奈良公園の鹿も同様だ。そんな時期に、あれだけの身体かみと角を持った個体を放置してはおけないだろう」

確かに、と弘武はうなづく。

「身体の大きさとしてあの程度の個体は他にもいるが、あれだけ立派に育った角を持っているものは今日まで確認されていなかったらしい」

「ニュースにもなっていたみたいだよ。スマホ持つてる子にさっき見せてもらっちゃった。

確認してみたけど、ボクたちは映ってなかったみたい」

「鹿は？」

「え？」

弘武の反射的な問いに鼎なべはきよとんとした目を返した。

「俺たちが映ってなかったのはいいけど、あの大きな鹿は映ってなかったのかなって。

ニュースになってるのなら、誰かが撮影していたものが提供されてもおかしくないだろう？」

「ああ、なるほど。でも、ボクが見せてもらったニュースにはなかったと思うよ」

「そっか。ありがとう」

（あんな大きな鹿、見た瞬間に咄嗟とつさに撮る人がいてもおかしくない気がするんだけどな）

弘武は訝あやしみつつ、温野菜を箸で突き刺す。

「……もしかしたら、また出てくるかもしれないね」

ファルのその声は不安というよりは、覚悟を決めたようなニュアンスがあった。

（やはりファルはあの鹿についてなにか知っているのか？ それだけじゃなく、小さい頃から俺の目にだけ見えているこの光の正体についても、ファルならばなにか——）

「明日は奈良公園メインだし、いざという時のためにまた鹿せんべいを用意しておくか。あれが出てきたら、それを撒まいて逃げる。また襲われても堪たらないからな」

スルーすることに決めたはずのその考えに首を振り、端的な鹿対策についてだけ述べると、ファルがすぐに両手を合わせて賛同してきた。

「さすが班長さんですね。頼りになります」  
 (からかわれている……というわけではないみたいだけど)

ファルの視線にむしろ熱っぽいものを感じて弘武が思わず視線を逸らすと、羽澄と視線が合ってしまった、今度は羽澄の方が慌てたように視線を逸らした。

「実際それくらいしか対処策はないかもしれない。鹿に対して危害を加えれば、こちらが逮捕されてしまう可能性すらあるしな」

「ええっ、鹿に襲われた場合でもダメなの？」

「もちろん、明確に襲われているならその限りではないが、誰がそれを判断する？ 樺沢の件にしたって、単に鹿が後ろ脚で立ちあがっただけとも判断できるだろう？ 昨今、鹿に対する悪質な悪戯や、暴行事件が数多く起きている。特に我々修学旅行生の行動に神経を尖らせている輩も少なくはないだろうさ」

十歳児は辛辣にそう言って、うっすらと笑みを浮かべた。

夕食を済ませて、割り当てられた部屋に戻ってくる。

二人一部屋の豪華仕様ではあるが、本来智郎と同じ部屋になるはずだった弘武はこのツインルームを一人で使うことになっていた。

せっかくの修学旅行の夜を一人で過ごすというのも寂しいものがあるが、今日の出来事を思い返すと、一人でゆっくりできる時間ができたことがありがたくも思う。

「そうだ。智郎のタブレットを充電しておかないと」

ベッドの枕元にあるいわゆるヘッドボードにコンセントがあるのを確認して、バッグからUSB充電器を探し出す。

タブレット自体はこちらに戻ってくる途中で羽澄から返してもらっていたが、自分ではまったく使っていないかった。

スイッチを入れるとすぐに画面が表示され、隅っこにある電池マークが四〇%台になっていることが確認できた。

「大して使っていないと思っただけ、もうこんなに減ってるのか。そういや、GPS使うと減りが早いようなこと言ってたっけ——」

アッオー！

バッテリーの減りをばやきながらUSBコードを繋いでいると、突然弾むような音がして、タブレットの画面になにかがポップアップした。

「なんだ……？ あ、メッセンジャーアプリか」

智郎あてのメッセージだったらどうしようと思ったのも束の間、ポップアップ自体は「弘武ーでろー」と表示されていて、智郎からだとしてすぐにわかった。

ポップアップをタッチすると、すでに何件か溜まっていた智郎からのメッセージがどっ

と流れでてくる。

「おお、これは鬱陶しい……」

弘武はリアルタイムのチャットにはあまり免疫がない。とはいえ、急な入院生活で暇であろう智郎のことを考え、必死にタブレットの画面をタッチして返信の文章を作成する。(あの鹿のこととか光のこととかを書くわけにもいかないしな……)

その辺りのことをすべてひっくるめて、『いろいろあって大変だった』で済ませる。

「大変……だったな、本当に」

だったと過去形で口にしたものの、なにかの原因が払拭されたわけではない。つまり、明日も大変なことが起こるかもしれないし、今日どころでは済まない可能性だってある。

スルーしようとして心に決めていた弘武だったが、明日以降のことを考えるとやはりファルにだけはしっかりと話を聞いておくべきじゃないかとの考えが頭をもたげはじめた。

だとすれば、それは、今、するべきなんじゃないだろうか。

なにしろこの部屋には弘武一人。ファルにこっそり来てもらえば、誰にも聞かれる心配なく、話をするができる。

その上、このホテルに泊まるのは今日限り。明日宿泊予定の京都では、クラスの男子女子で分かれた大部屋に泊まることになっていた。

つまり、今こそが一番都合のいいタイミングとなるわけだ。

「じゃあ、呼ぶか……」

——**ちょっと待て。**

弘武の内心で強烈な待ったがかかった。

修学旅行だぞ？

修学旅行の夜に、女子を一人で呼び出すっていうのは、それなりの意味を持ってしまふことなんじゃないのか？

いや、修学旅行じゃなかったとしても、ホテルの部屋で男女二人きりになるって話じゃないのか？

**ホテル!?**

いやいや、違う。そういうことじゃない。俺にやましい気持ちなどない。俺は班長として、事態を把握し、将来起こるであろう危難をできる限り排除せねばならないのだ。

そのための呼び出しであり、これは事態に対して班員と協議するための——  
アッオー！

「わひゃいっ!」

ファルを呼び出すか否かで煩悶していたところに、再びメッセージアプリの特徴的な音が鳴って肝を冷やす。

悪態をつきつつタブレットの画面を見ると、メッセージはやはり智郎からだった。

『ライブイベントはないのか？ 女子の部屋に行ったり、女子を連れこんだりさ。なにもしなけりゃ後悔するばかりだぜ?』

「だからこれはラブイベントじゃない！ あくまでも班長としての——」  
と、そこまで口に出してしまい、己の動揺ぶりを再確認してしまう弘武である。  
「落ちつけ、落ちつこう……」  
大きく深呼吸してから、『なにもしないし、後悔もしない』と打ち込み、額に噴き出した嫌な汗を拭った。

「ふう……智郎のヤツめ……」  
コンコン。

「はひっ!？」

タブレットの画面を見てしまったから、この音はドアの方からしたと気がつく。

これで、智郎が後から追いかけてきたとかなら大笑いなんだけど……まあ、これから手術じゃそれもないか。クラスの他の男子が訪ねてきたというところだろう。

などと思しながら、弘武は部屋のドアを開いた。

「弘武さん、こんばんは」

目の覚めるような美しい金髪に、春の日射しを思わせる柔らかな微笑み、そして、その両脇に飛び出た特徴的な耳と、弘武にだけ見えているであろうテニスボール大の緑色の光。

もちろん、大きくて柔らかそうなその胸についたパーツにも目を向けずにはいられない。そこにいたのは紛れもなくファルであり、弘武はたつぷり一秒かけてその事実を認識し、認識した瞬間に彼女を部屋に引き入れて、廊下に誰もいないかを確認した。

「だ、誰にも見られてはいないか。よかった……ふう、焦った……」

別にこれはラブイベントではないのだから、誰に見られていたとしてもやましいことはなにもないはずなのだが、羽澄を押し倒したという噂がたったその当日に、さらにファルを部屋に連れこんだなどという噂をたてられては目もあてられない。

「どうしてここに？」

扉を閉めて振りかえると、ファルはちょうどバスルームのドアを開けたところだった。

「ここがお風呂なんですわねー。わたしとしては、お風呂は広いところの方が好きです。明日泊まるころは大浴場だと聞いていますので、とても楽しみにしているんですよ」

「あの、お風呂の話じゃなくてですね」

あまりの事態に敬語になつてしまう弘武である。

「もしかして、おくつろぎのところをお邪魔してしまったでしょうか？」

「そういうことはないけど」

弘武は確かにファルと話があった。そのために彼女を呼び出そうとも思っていた。

だが、呼び出す前に彼女の方からやってくるという事態に、それらの目的が頭の中からすっ飛んでしまっていた。

——まさか、霊能力者であることを知ってしまった俺の口を封じに来た……とか？

やばい。もう部屋に入ってしまったぞ!! これでは逃げられぬか!! いやいや、違う。ファルは怪しいかもしれないが、悪い子じゃない。悪い子じゃないはずだ!!

「そうそう、紅色べにいろさんのおうちの風呂って、すっごく広いんですよ？ わたし、この世界のお風呂はみんなこんなに広いのかと思ってびっくりしてしまっただけ——」

「……この世界の」

「あ……この国の、です」

皮肉にもその言い間違い（？）によって、弘武は若干の冷静さを取り戻すことができた。「え、ええっと……そうです！ わたしはほら、曾根崎智郎そねざき ちろうさんの代わりに五班に入ったようなものじゃないですか。でも、わたしは女子なのであるあさんと一緒のお部屋になり、弘武さんはひとりぼっちになってしまったわけです。ですから、その……弘武さんが一人で寂しくしているんじゃないかと思ひまして……ええと……」

ファルの言いたいことはわからないでもなかった。

枕野まくらのなるあが部屋に戻るなり寝てしまったらうことは言われなくても想像がつく。

「一人で寂しくしている」は、弘武のことではなくファル自身のことなのだろう。

だが、それならば他の女子のところ、例えば羽澄たちの部屋や、花山院かざんいんの部屋に行くという選択肢もあつたはずだ。

（それでもその中でここを選んだというのは、智郎の代わりがどうかということではなく、ファルが俺と同じこと——今日起きた不可思議な事件について話しあう——を考えたからなんじゃないか……？）

取り繕うようにして話の接ぎ穂を探すファルを見て、弘武はその確信を深めた。

一つ頷うなずいて、思い切って切り出す。

「聞いていい事かどうかわからないんだけど……ファルは、いったいなんなんだ？」

「なに……と言いますと？」

「じゃあ、質問を変えよう。ファルは今日、酒船石しゅせんいしでなにをしていたんだ？」

「酒船石で……ですか？」

ファルがコクリと喉のどをならしたのを見て、弘武はファルの緊張を確信する。

「俺たちを先に行かせて、一人で酒船石に残っていたらどう？ そう、空気がよかつたら息を吸いこんでいたとか言っていた時のことだよ」

「そつ、それはそのつ、空気が……よかつた……ので」

「本当に？」

「……………」

「ここで、ファルが本当だと言ふなら——」

その瞳ひとみが所在なげに揺れているのがわかった。

「俺はそれを信じるし、もう問い詰めたりしない」

「弘武さん……」

「今から俺が言うことは、すべて戯れ言ごせだと思つて忘れてほしいんだけど……俺には不思議な光が見えている」

「不思議な光、ですか？」

「ああ、今も、ファルの肩口辺りに浮かんでいる、これくらいの光の玉とかな」  
美しく澄んだ瞳が大きく見開かれる。

「それだけじゃない。ファルの耳もだ」

「みっ、耳!? わたしの耳がどうかしましたか!？」

「尖<sup>とが</sup>って、見えてる……!」

「とがっ!? いやっ、あのっ、まさかっ、そんなっ、そんなわけっ……い、いやですわね、弘武さん、わ、わわっ、わたしをかついでいらっしやるんですわね?」

「……………」

「……ですわね……?」

弘武はゆっくりと首を左右に振り、そしてきっぱりと言いつつ。

「超尖<sup>とが</sup>って見えてるんですけど!? 人間の耳じゃないだろ、それ!」

「これ、人間の耳に見えてないってことですか!？」

「だから、そう言っただよ! ファルはいったいなんなの!？」

今度は目ばかりではなく、口もぽっかりと開けて、ファルはふらふらと頭を巡らせた。

「……ごめん。やっぱり忘れてくれ。別にファルがなにあってもいいんだ。ファルはファル、俺たち五班の仲間には違いない」

言っってしまったから冷静さを取り戻す。言い繕った言葉はどこか上滑りしているように弘武は感じていた。

「いえ、謝らなければいけないのはこちらの方です。申し訳ありません」

だが、ファルの方も冷静さを取り戻したように、静かにこうべを垂れる。

そして、再び顔をあげ、真剣な眼差<sup>まなざし</sup>しで弘武を見据えた。

「弘武さんにはすべてをお話したいと思います。そもそも、わたしがこの部屋を訪ねたのは弘武さんとお話をするべきだと考えたからなんです」

弘武は真顔で頷きながら、ふと、なんでこんな話をバスルームで、しかもトイレも一緒にユニットバスのとこでしてるのだろうかと思いはじめた。

「驚かれるかもしれませんが、実はわたし——**異世界から来たエルフなんです**」

「……………」

「……………」

予想していた内、もっとも荒唐無稽<sup>こうとうむけい</sup>だと思っていたその答えを、真摯<sup>しんし</sup>な瞳で言っただけのファル。しかも、弘武の反応を恐る恐るといった様子で窺<sup>かが</sup>っている。

——違うだろ。人をかつぎたいなら、渾身<sup>みんみん</sup>のギャグを言ったつもりなら、もっと悪戯<sup>いたづら</sup>な顔とかをしなくちゃいけないところだろ。

「ごめん、この話はやっぱりなかったことにしよう」

「どうしてですか!?! わたしがなんなのか聞いてきたのは弘武さんじゃないですか!」

「確かに聞いたのは俺だけど! もう何度も何度もツッコミたくてしょうがなかったけど! 世の中にはどうしても認めたくないことだってあるんだよ!!」

「認めたくなくてもそれが事実なんです！ 弘武さんの知りたがっていた真実なんです！」

「あーあー、聞こえない！」

両耳を手で塞いで、受け入れがたい現実を遮断してしまう弘武。そんな手を耳から離そうと、ファルは弘武の腕を両手で掴んで引っぱった。

「なんで耳を塞ぐんですか！ わたしの話を聞いてください！ わたしはですわねっ、こことは違う世界からきたエルフで——あっ」

狭いバスルームでそんな風に暴れたからだろう。ファルは足拭き用のタオルに足をとられてバランスを崩した。

「わわわっ」

「あぶなっ——」

弘武は咄嗟にファルの左腕を取り、ファルも右手で壁をついて自らを支えた——つもりだったが、実際に右手がついた先は壁ではなくシャワーのバルブだった。

「きゃあああっ!?!」

「うわっ!?!」

気がついた時にはすでに遅く、シャワーから景気よく水が噴出して、弘武とファルの頭上に降り注ぐ。

「ごっ、ごめんなさい！ え、えっと、どうすればっ」

「ともかくそのバルブを捻って——」

「これを捻るんですね！」

「ぬおっ!?!」

ファルの必死の対処を嘲笑うかのように、シャワーの勢いがさらに増した。

「逆！ 逆に捻って！」

「は、はいっ！」

やっとのことでシャワーからの水が止まって、二人は荒い息をつく。

「はあ……び、びっくりしました……」

「わ、わたしもびっくりしました……。本当にごめんなさい……」

「いや、俺の方……こそ……」

顔を拭ってからファルを見、絶句する弘武。

びしょ濡れとなったブラウスその下が、完全に透けて浮き出ってしまった。

しかも、透けて見えているブラジャーは、ファルのほんわかした雰囲気とは似つかわしくない豪奢なデザインのもので、カップの上の部分はギリギリまで露出している。

——ああ、このおっぱいは真正正銘、本物の巨乳なんだ。

エルフってスレンダーなイメージだったけど、巨乳エルフなんてファンタジーが本当にあるとはな……。

ファルが異世界から来たエルフだという告白に耳を塞いだばかりの弘武だったが、おっ



ぱいの真実については受け入れざるを得なかった。

「あの、弘武さん？ 大丈夫ですか？」

「あ、ああ、ごめん。そうだ、バスタオルがベッドのところにあったな。取ってくるよ」

「はい」

と、弘武がバスルームから出たその時――

コンコン。

「!?」

弘武の部屋のドアが、控えめに、だが少し焦っているようなスピードで叩かれた。

――いやっ、今はマズイ。これに出るわけにはいかない。今のこの状態が他の男子に知られようものなら大惨事だ！

コンコン。

だが、弘武のその思いを否定するかのように再び鳴らされるノック。その上、小声だが有無を言わさない声が聞こえてきた。

「弘武、いるんでしょ？ いるなら開けて。他の男子にバレちゃうからっ」

――このタイミングで羽澄<sup>はすみ</sup>!? 他の男子よりはマシか!? むしろ別の方面に大悪化!?

どどど、どうする!?

どうするって言われても、ファルが濡れ透けのこの状況で羽澄を部屋に入れるなんて選択肢はあり得ないだろ!?! どう釈明したって誤解される!!

コンコンコン。

「弘武っ、はやくっ。誰か来るみたいなのっ」

だがっ、羽澄が俺の部屋に来ていることを誰かに知られるわけにもいかない！

それは俺より、羽澄の学生生活が終わってしまいそうな展開だ！

そこまで考えると弘武は、素早くバスタオルを取ってバスルームにとって返すと、きょんとしているファルにバスタオルを押しつけ、

「すまないが大人しくここで隠れていてくれ。頼む！」

と言ってバスルームのドアを閉めた。

「弘武っ」

部屋のドアを開けるなり、羽澄を部屋の中に引っ張り込む。

「きゃっ!？」

そして、ボタンと音を立ててドアを閉めると、部屋の前をしゃべりながら通っていく男子の声が聞こえてきた。

「今、女の悲鳴みたいな聞こえなかった？」

「そ、そういうのやめるよ。ドア閉める時に、軋んだ音でも聞こえたんだろ」

「怖い話じゃなくて、わりとかわい感じの声だったんだけどな」

「だ、騙されないからなっ」

その声は徐々に遠ざかっていった。

「ふう……行っったか。ごめん、羽澄、遅くなった」

「う、うん……ちょっとびつくりしたけど……。もしかして、誰か来てる？」

「い、いや？ 誰もいないぞ？」

「なんか声が聞こえた気がしたんだけど」

「ああ、シャワーの使い方を確認しようと思ってバルブ捻ったら、思いっきり水を被っっちゃまってさ、ヘンな声が出た」

「ぶっ、バカねえ。でも、それでびしょ濡れなのね。なかなか出てくれなかったのもそういうことか……うんうん」

苦笑しつつ、なぜかホツとした様子で何度も頷く羽澄。

「それでなにか用か？ さすがに女子が男子の部屋に入ってきてるのは、ちょっとマズイ感じだぞ？ ただでさえ俺たちは奈良公園でのが噂になってるのに」

「わ、わかっているわよ、そんなこと……。そんなにわたしが来ちゃ迷惑なわけ？」

「迷惑っていうんじゃないくてさ、こういうのが噂になったら、俺なんかより羽澄の方がダメージ大きいだろ。女の子なんだから」

「……わたしの、ため？」

「いや、まあ……俺のためでもあるが」

「ぶっ、ふふ」

怒って尖らせていた口から、突然笑いがこぼれだした。

「笑うなよ」

「笑うわよ。弘武ったら相変わらずなんだもん。昔っからそうだったわよね。わたしや瑛那のために身体張ってさ、『俺は俺のためにやっただけだ』とか言ってたやつけるの」

「別にかっこつけてなんて言っていないだろ」

むしろ、「俺今かっこわるいな」などと思いついていた弘武である。

「だから……結局またひびきたいちゃったし、そのお詫びというか……」

羽澄はブンと勢いよく頭を下げた。

「ごめんなさいっ」

「……ホテルに着いてからの分に関しては、俺の自業自得だと思ってるんだけど」

「そ、そりゃあ、あんなデリカシーのない発言はないと思うんだけど……でも……よくよく思い返してみたら、あれはあれで、弘武としてはわたしをフォローしようとしてくれたつもりだったのかなって……」

どういうつもりかとはともかく「いい乳に成長してる」はセクハラとみなされてもなんらおかしいところはない発言である。

「だからちゃんと謝ろうって思ってた……。それで部屋まで来たら、弘武、いる気配はあるのに全然出てきてくれなくて、弘武が、その……わたしのことを怒ってて、無視してるんじゃないかとか……思っちゃって……」

「俺、たとえケンカした時でも羽澄を無視したことなんてなかったと思うぞ」  
 「そうだけどさ……ちよっと今日は……容赦なく叩いちゃった感じだし……。弘武はわたしを助けてくれたのに……」

「なんだか話がループしてきたぞ？ 今日羽澄はずいぶん情緒不安定だな」

「だって……」

弘武はポンポンと羽澄の頭に手をやった。

「うん、俺の方こそごめんな」

「うん、弘武……」

瞼の縁に涙を溜めていた羽澄は、ホッとした笑みを浮かべて弘武を見つめた。

——なにが起きている!?

—— 修学旅行中の宿泊先とはいえ、ここはホテルの一室である。しかも大部屋ではなくツインルーム。

ツインルームと言えば、ベッドが二つ備えられている部屋だ。そんな部屋の中で、憎みかと思っている幼なじみとなんだかちよっといい雰囲気で見つめあってしまっている。

ラブイベントなのか？ これがラブイベントなのか？

バスルームに異世界から来たエルフが隠れているけどな！

「弘武……わ、わたし……わたしね？」

「オ、おう……」

弘武は動揺のあまり、頷くだけでも声を裏返らせた。その上——  
コンコン。

「!?!」

二人はそのノックの音に心臓を跳ねあがらせる。

「だだっ、だれが来たの!?!」

「わ、わからんっ」

コンコンコン。

少し焦りを感じさせるノックのスピードに、堪らず羽澄が動きだした。

「わたし隠れてるから、なんとかやり過ごして!」

「ちょっ、羽澄!」

「いいから、出て!」

小声が怒鳴りながら羽澄は弘武を部屋の入り口の方へと押しやり、自分はバスルームのドアを開け——

「ヒッ——」

と小さな悲鳴をあげた。

「しーっ。大人しく隠れていないとダメです」

そして聞こえてくる羽澄を窘めるファルの声。

——終わったな。

羽澄のことはファルがなんとかなだめてくれるだろうが、ファルがいることが羽澄にバ  
れている時点で、すでにゲームオーバーである。

弘武は自らの死を覚悟した。

コンコンコンコン。

——しかもノック激しいし。もうどうにでもな〜れ♪

これ以上ないほどの慈愛の表情を浮かべ、弘武は部屋のドアを開いた。

表情は優しげだったが、頬には涙が零れていたかもしれない。

「ごめんっ、早く中に入れて!」

「わっ、し、塩見!」

そして、再び激しく閉められるドア。その向こうからはしゃべりながら廊下を歩く男子  
の声聞こえてきていた。

「なんか今、『早く中に入れてえっ!』とか聞こえなかったか?」

「誰かエロ動画でも持ってきてるのかな。PC研のヤツらとか」

「おお、エロ動画鑑賞会か。修学旅行らしくなってきたぜ」

「よし、乱入するか」

そしてまた、その声は遠ざかっていく。

「ふう……びっくりした」

「びっくりしたのはこっちだよ。どうしたんだ、いったい」

「ごめんごめん。でも谷井くんは一人のはずだから、お邪魔しちゃってもいいかなって思っただけ。羽澄が他の部屋の写真撮ってくるって言って出ていっちゃったから暇だったんだ」  
 ——これを聞いて、羽澄はバスマルームでどんな顔をしていることだろう。いや、まだ濡れ透けのファルを見て固まったままかもしれない。

今の弘武は執行を待つだけの身となった死刑囚そのものだった。

「それに……さ。谷井くんとは、ちゃんと話しておきたくて……」

「え……」

鼎が少し恥ずかしそうに、上目遣いで弘武に目を向ける。

塩見鼎はそのこざっぱりした外見と男子顔負けの運動性能、そして、はっきりとして爽やかな物言いのかつこよさで、下級生女子から絶大な人気を博している。

その鼎が今、弘武の前でなんだかもじもじとして、つま先で絨毯に跡をつけている。

——ラビイベントなのか？　これがラビイベントなのか？

すでに死刑が確定している身だけどな！

「谷井くん、今日ボクの様子を心配してくれてたじゃないか。だから、谷井くんだけにはちゃんと話しておこうと思っただけ……」

「俺にだけ？」

「うん。あんまり人には知られたくないことだから」

ここでの会話はどうしたってバスマルームの二人にも聞こえてしまうだろう。

だが、鼎は弘武にだけ話しておきたいことだという。

ならば、それを鼎に話させてしまおうわけにはいかないのではないかな。

とはいえ、鼎に「他に人がいるから」と明かしてしまってもいいものかどうか。

(なんで今日なの……？　厄日なの……？)

弘武はとっくの昔に涙目だった。

「谷井くんはさ」

「え、はい——っていうか、その話、今じゃないとダメか？」

「んー……できれば話せる内に話しちゃいたいかな。後悔、したくないし」

「そ、そうか」

(どうにかして、話を逸らした方が……いや、しかし、真剣に話をしようとしている相手に対して、ヘンに誤魔化すような対応するのは、なんだか失礼な感じがする。ううっ、どうすればっ)

ヘンなところで生真面目さを發揮させるのも弘武という男である。

「谷井くんはボクと結構仲よく話してくれるじゃないか」

「まあな。塩見、いいヤツだと思っし、俺としても話しやすいし」

「アハハ、ありがとう。うん、そう言ってくれる男子は、谷井くんの他にもいるにはいるんだ。運動部の子たちとかね」

「塩見はしょっちゅういろんな部活の助っ人に入ってるもんなあ。どっかに腰を落ちつけ

れば、すぐにレギュラーになれるだろうに」

これでなんとか話が脱線しないだろうかと弘武は祈る。

「まあ、その話は今はいいんだ。それもよく言われるけどね」  
しかし脱線は許されなかった。

「谷井くんだけなんだ……。ポクとすぐ気さくに話してくれるのに、さりげなく女の子扱いしてくれるのは」

「女の子扱いって……。塩見、女の子じゃん。……。えっ!? まさか違った!?!」

「女の子だよ!! だからっ、谷井くんがそうしてくれるのが嬉しいって言ってるんだよ!」

「すまん。なんかびっくりして。ちょっと今日はいろいろありすぎて、頭がおかしいんだ」  
おかしくなりそうなのではなく、おかしい、と弘武は断言した。願望込みだった。

「まったくもう……」

鼎の呆れた苦笑が、少し照れを含んだものに変わる。

「で、まあ……。ここまですぐ前提というか……。ここからが本番なんだけど……」

「ちよ、ちよと待ってくれ」

——これっでもう、アレだよな?

いや、わりと嬉しかったりもするんだけど、バスルームの二人に聞かれながらするものじゃないよな? やっぱり。

「や、やっぱり……。こういうのは、迷惑、かな……」

「い、いやっ、迷惑ということは絶対じゃない! うん、大丈夫!」

「ホント!? よかったあ……。え、えっとね、だから……。そういう谷井くんだからこそ、どうしても言っておきたくなっちゃったんだ。実は、ポク——」

その時だった。

「ふあくちゅんっ」

弘武と鼎は目を見あわせたまま、ピタリと静止した。

「今、なにか——」

「ハックション!ズズッ。すまん。実はさっき水を被かぶったままで、ついくしゃみが」  
鼎のその疑問を遮って、なんとか誤魔化そうと試みる弘武。

「ううん、バスルームに誰だれかいるよね? うわ、なんで今まで気がつかなかったんだろう」  
だが、弘武が聞き取った以上に、鼎はその音を正確に聞き取っていた。

「ちよ、待った塩見!」

弘武が止めるより速く、鼎は無駄のない動きでバスルームの扉を開いてしまう。

「あ、あはは……。どうもお〜」

「ごめんなさい、弘武さん。さすがに身体が冷えてきてしまっ……。つくちゅん!」  
状況を理解していたらしく、羽澄はすみとファルは観念した様子で鼎の前に顔を出した。

「なんだ、羽澄とファルさんかあ……。びっくりした。二人ともここに来てたんだね」

「ごめんね、鼎。なんか大事な話してたみたいだったから、出るに出不然なくて……」

「アハハ、いいよ。確かに男子の部屋に来てる時に、誰かに訪ねてこられたらボクも慌てて隠れると思う」

鼎は顔を赤らめながらも、それでも笑ってみせる。

この事態でも慌てたり怒ったところを見せないあたり、さすが塩見だと弘武は感心した。

「本当に……くちゅんっ……申し訳ありません」

「わわっ、そういうえばファルちゃん、濡れたままだったわね。早く部屋に戻って温まった方がいいよ」

「そうですね。お世話をかけます」

ファルは本当に申し訳なさそうに目を伏せる。

「じゃあ、ボクたちは戻るね。おやすみ、谷井くん。また明日ね」

「あ、ああ、おやすみ。戻る時、見つかるなよ？」

「ここすぐ階段だし、余裕でしょ、余裕。じゃあね弘武、おやすみ」

「おやすみなさい、弘武さん」

女子三人は口々におやすみを告げ、廊下の様子をうかがってから、素早く弘武の部屋を出ていった。

「……………」

急に静かになった部屋の中をゾンビのような足取りで歩く弘武。どつと疲れが襲ってきて、ベッドにドサリと腰をおろした。

辛い死刑が執行されることはなかったが、執行が延期されただけのようにも思えた。

「なんだったんだ、今は……」

弘武はこれまで彼女を作ったことはない。

幼なじみの羽澄は確かにそれにもっとも近い存在だったが、お互いにそういう関係だとは思っていないはずだし、好きだと言ったことも言われたこともない。

そもそも女性から「好き」などと言われた経験は、死んだ母親からと幼い頃の瑛那（こゝろいもと）からくらいしかない。あの頃の瑛那は「お兄ちゃんのお嫁さんになる」と言っただけで聞かなかつたものだが……と述懐しかけてやめる。

妹との思い出に逃避したくなる程度には混乱中の弘武だった。

「待てよ？ 羽澄も塩見も、俺に告白しようとしたわけじゃないんじゃないか？」

いくら修学旅行という告白シチュエーション目白押しの大イベントとはいえ、修学旅行は今日がじまったばかり。羽澄も塩見も同じ五班として、修学旅行が終わるまでほとんど同じ時間を共有することになる。

告白が成功して相思相愛恋人同士という状態になれるのなら、それはもうハネムーン状態だろうが、失敗した場合の悲惨さは想像するのも怖ろしいレベルだ。

二人が二人とも、そのことをまったく考えていないとは思えない。というか、二人ともそんなにバカじゃない。塩見だって成績は悪い方だけど、そういうところの計算ができないタイプじゃないと思うし。

弘武はボンと手を叩く。

「二人ともなにかを言おうとしていたが、それは別に好きとか嫌いとか、そういうことじゃない、ということ。そんなことより、ファルだよファル。まさか本当にエルフだとか言いだすとは……」

羽澄と鼎のことを無理矢理片づけると、今度はもつと重たい現実が思い出された。何度思い返してみても、それを現実だと受け入れたくない。

「しまった。異世界のエルフ」とかいうのを受け入れたくないあまりに、化け鹿のことを聞くのをすっかり忘れてた……。はあ……。やっぱりファルの話はちゃんと聞かなくちゃいけないか……。というか、この面白アクシデントがすべて、ファルの話をちゃんと聞かなかったから発生したように思えてきたぞ……」

タイミング的にそんなはずはないと思いつつ、因果応報という言葉が脳裏に浮かんで消えていく。そこへ――

アッオー！

「！ くっ、このタイミングでまた智郎から……。イベントフラグっていう意味じゃ、こいつがラブイベントがどうたら言いだしたのがすべての元凶の気が――」

ぶつぶつと悪態をつきつつ、律儀に智郎からのメッセージを確認する。

「認めたくないものだな、若さ故の過ちというものは」

「バストタイミング過ぎるわッ！」

弘武は思わずタブレットをベッドに叩きつけていた。



夜空を煌々とした月が照らす中、ホテルから抜け出す少女の姿があった。

月の光が少女の持つ美しい金色の髪をさらに煌びやかに飾りたてている。

「つくちゅん。……やだ、ちゃんとお風呂で温まっただけなのに。後でもう一度入った方がいいかしら」

その少女、ファルファリアルレンシアは一つ身震いすると、ホテルの玄関口を振りかえり、その白く細い腕を巧みに動かして、空中になにかの紋様を描きだした。

「弘武さんのお話……。彼に見えているもの……。信じられないほどの特殊な事例ですけど、それがもし本当なら……」

念を込め、印を結び、呪文を唱える。

「……ふう。この結界で少なくとも、今夜はしのげるはず」

――だけど。

ファルはその顔に憂いを忍ばせた。

「弘武さんの見たものが本当にペリユトンなら、彼女たちもこちらの世界に渡ってきてしまったことになります。移動中の防護もいくつか用意しておかないと……」

夜の風がその頬ほおを撫なでていき、ファルはなびく髪を右手で梳すいてから自嘲じちよう気味の笑みを浮かべた。

「不思議です。幾重もの万が一を重ねても、あり得るかどうかわからない。そんなことを言われているのに……わたし、弘武さんの言ったことをすべて信じてしまっています」

異界の月――

その見え方は異なっているとしても、それから降り注ぐ光はファルの世界と同じく優しげに感じられる。

「この世界の人たちはいい人ばかりです――くちゅんっ」

再び湧きでたくしやみに身震いすると、ファルはそそくさとホテルの中に戻っていった。



その数分後、先ほどまでファルが立っていた場所に、艶つややかな黒髪をなびかせた女性が現れた。

「フン……この世界でこれほど強固な結界を張れるとはね……。ファルファリアルレンシア、将来の評議長を囑望された神童だとの噂うわさを聞いたが、あながち言い過ぎでもないところか――」

その鋭い美貌かすに微かな笑みが浮かぶ。

「だが、これで確信に変わった。ペリンがじゃれついたあの少女こそが『アエテルノミコン』の所持者……」

獲物たくらを狙うへびのごとく、ちろりと舌を出して唇を濡らす。

「さて、どうしたものか。あまり強硬な手に出て、この国の警察とかいう組織に目をつけられるのも面白くない。リタたちに合流できればいいのだが……どこに飛ばされたやら。」

まあ、どのみち今夜は難しそうだ。タイミングを見計らうとしよう――

彼女はそう呟つぶやくと、暗闇くらやみに溶けこむようにその場からいなくなつた。



月は、そこから遙はるか離れた街中を歩く二人の少女のことも照らしていた。

一人はパーカーのフードを目深にかぶっている。ホットパンツからスラリと伸びた褐色の脚が健康的な美しさを醸しだしていた。

「ねえ、リタ」

リタと呼びかけられた方は対照的に白磁のような白い肌をしている。衣服も白を基調としており、至る所にフリルがあしらわれたお人形のようなファッションだ。

「……」

「ねえってば」

「……」

「無視すんなよ！ 感じ悪いなあっ！」

「……無視してない。ちゃんと目を向けたわ」

「答えてよ！ ちゃんと返事して、返事！」

いらつきを隠さないその台詞に、リタは小さくため息をつく。

「ヴァイス……。イライラしても問題は解決しないわ」

「あたしはリタが答えてくれないからイライラしてるんじゃない！ 誰のせいだよ！ リタでしょ！」

「違う。ヴァイスがイライラしてるのは、いつシュウウィーと合流できるかわからないから。そのイライラを私にぶつけているだけ」

「それがわかっているなら、早くシュウウィーと合流しようよ！ いる場所わかったんだろ！？ ナラだっけ？ 早くそこに行こうよ！」

「……また説明するの？」

ヴァイスのいらつきにリタは今度は盛大にため息をついた。

「だから遠いんだろ！？ 馬でも馬車でもさっさと調達しなきゃダメじゃん！」

「だから……はあ……」

もう一度深いため息。

「この世界のこの国では、馬という移動手段は一般的ではないのよ。一般的なのは自動車

と呼ばれるものか、電車と呼ばれるもの。自動車を調達するのは難しいし、その操縦にも

問題があるから、電車で向かうのが妥当。電車というのは乗り合い馬車の巨大版だとも思っておいて。そして、それは明日の朝になるまで出発しないの。わかった？」

「……電車というものに乗る」

「ええ」

「それは朝になるまで出発しない」

「そうね」

「……だったら、あたしたちは今、どこに向かって歩いているんだ？」

「だから……はあ……」

リタは再びため息をつきながら、袈裟懸けにしていたポシエットから手のひら大の長方形の物体を取りだし、その表面を指で何度もなぞりはじめた。

「また、その光る石版か」

「スマートフォンよ。略してスマホ。——ほら、これを見てヴァイス。この時間ならまだ聞いているわ」

「この国の文字わかんないし。で、なんでそこに行かなくちゃいけないのさ」

「翻訳魔法の精度はもう少しあげておかないと……」

「ううっ、うるさいなあ。そんなのわかってるっての。んで？ なんなのよ、それ」

「この街のことを調べたら、絶対に行っておくべきお店だって」

「は？」  
 「特にチンジャオロースーとホイコーローがお薦めらしいから、二人で一つずつ頼みましょう。わかった？ 今度こそわかったわよね？」

「それはなんの呪文なわけ!? つていうかリタ、異世界に来てるのに馴染みすぎだよねえ! その石版だっていつどうやって手に入れたんだよ! なんなのあんた、マジで!」

「はあ……。ほら、行くわよ」

「答えてよ! ぐあーっ、もう! ホントにムカつくなあっ!」

ヴァイスの憤りを他所に、リタはすたすたと歩いていってしまおう。

——このまま別れて単独行動を取ってやろうか。

そんな考えがヴァイスの脳裏をよぎるが、その時、大型のトラックがクラクションを鳴らしながら彼女の横を通りすぎていった。

「こっ、こわっ! この世界の乗り物、マジこわっ!」

——リタはなにを考えているかまったくわからないしムカつくけど、こんなヤツでもないよりはマシ……。

「というか、リタいなかったら、あたし、絶対のたれ死んでただろうしなあ……」

「ヴァイス」

「はいはい、行きますよ。行けばいいんですよ。ったく」

そうして二人の少女は、暗闇の中に明るく看板を光らせる中華食堂に入っていった。



最後まで立ち読みしてくれて  
 どうもありがとう!  
 続きは本で楽しんでね!